

長崎県文化財調査報告書 第106集

県内古墳詳細分布調査報告書

—— 県内古墳の墳丘・石室の資料化に伴う報告書 ——

1992

長崎県教育委員会

発刊にあたって

このたび、県教育委員会では県内に所在する古墳の中から、特に重要な前方後円墳、大規模な円墳など12基を選出し、墳丘地形実測、石室実測等の詳細調査を行い、その結果を公刊することにしました。

この調査は国庫補助事業として、平成元年度から平成3年度までの3か年間実施したもので、新しい事実や興味ある問題が提起されました。これらの解明のために、将来、機会をみて、更に詳細な発掘調査を実施したいと考えております。

この調査報告書が、本県の古墳についての理解を深め、ひいては、学術研究に役立つことができれば幸いです。

終わりに、調査に御理解と御協力をいただきました地元の関係の皆様に深く感謝申し上げます。

平成4年3月

長崎県教育委員会教育長

清浦義廣

例　　言

1 本報告書は、平成元年度から平成3年度まで実施した、県内古墳詳細分布調査の結果について報告するものである。

2 調査は、平成元年以降国庫補助を得て長崎県教育庁文化課で行い、該当古墳の所在する町の教育委員会の協力を得た。

3 それぞれの古墳の調査は、以下の分担で行った。

出居塚古墳	高野晋司・浦田和彦
百合畠古墳群第1号墳	藤田和裕・宮崎貴夫
百合畠古墳群第20号墳	安楽 勉・町田利幸
掛木古墳	宮崎・村川逸朗
笹塚古墳	藤田・町田
双六古墳・梶上山古墳第1号墳	高野・副島和明・村川
大原天神の森1号墳・2号墳	正林 譲・小野ゆかり
対馬塚古墳	高野・藤田
岳崎古墳	南島・村川
守山大塚古墳	藤田・宮崎・町田・小野

4 本書の各項は、調査担当者が分担して執筆した。執筆者は各項の最後に記している。

5 本書に使用した写真は、各古墳の担当者の撮影による。

6 本書の編集は藤田が担当した。

本文目次

第1章はじめに	1
第2章調査	3
・調査の概要	3
1) 対馬	4
・出居塚古墳 墳丘	5
石室	6
遺物	6
2) 壱岐	9
・掛木古墳 墳丘	10
石室	10
遺物	15
・百合畠古墳群第1号墳 墳丘	19
・百合畠古墳群第20号墳 墳丘	22
・並塚古墳 墳丘	24
石室	27
遺物	31
・双六古墳 墳丘	37
石室	38
・対馬塚古墳 墳丘	44
・櫛上山古墳第1号墳 墳丘	48
・大原天神の森1号墳 墳丘	51
・大原天神の森2号墳 墳丘	53
3) 北松浦郡	54
・岳崎古墳 墳丘	56
4) 南高来郡	57
・守山大塚古墳 墳丘	57
第3章まとめ	62
1) 長崎県の古墳	62
2) 6世紀から7世紀における日本と朝鮮半島の状況	62

挿 図 目 次

第1図	調査古墳・県内前方後円墳位置図	2
第2図	出居塚古墳の位置と周辺地形図 (1/25,000)	4
第3図	出居塚古墳墳丘実測図	5
第4図	" 石室実測図	5
第5図	" 出土銅鏡実測図	6
第6図	" 墳丘実測図	7
第7図	老岐島中央部の主要な古墳分布図 (1/25,000)	9
第8図	掛木古墳周辺地形図 (1/5,000)	10
第9図	掛木古墳 墳丘実測図	11
第10図	江戸時代末期の掛木古墳	12
第11図	掛木古墳 石室実測図	13・14
第12図	" 出土遺物実測図	17
第13図	百合畠古墳群第1号墳・笠塚古墳周辺地形図 (1/5,000)	19
第14図	" 第1号墳 墳丘実測図	20
第15図	" 第20号墳 墳丘実測図	23
第16図	江戸時代末期の笠塚古墳	24
第17図	笠塚古墳 墳丘実測図	25・26
第18図	笠塚古墳石棺の図	27
第19図	笠塚古墳 墳丘復原図	28
第20図	" 石室実測図	29・30
第21図	" 出土土器実測図 (1)	31
第22図	" 出土土器実測図 (2)	33
第23図	" 出土土器実測図 (3)	35
第24図	双六古墳周辺地形図 (1/5,000)	37
第25図	" 墳丘実測図	39・40
第26図	" 石室実測図	41・42
第27図	対馬塚古墳 周辺地形図 (1/5,000)	44
第28図	" 墳丘実測図	45
第29図	" 石室略図	46
第30図	観上山古墳・大原天神の森古墳群の位置と周辺地形図 (1/25,000)	48
第31図	観上山古墳第1号墳 周辺地形図 (1/5,000)	49

第32図	観上山古墳第1号墳 墳丘実測図	50
第33図	大原天神の森1号墳 墳丘実測図	51
第34図	" 2号墳 墳丘実測図	52
第35図	岳崎古墳の位置と周辺地形図 (1/25,000)	54
第36図	" 墳丘実測図	55
第37図	守山大塚古墳の位置と周辺地形図 (1/25,000)	57
第38図	守山大塚古墳周辺地形図 (1/5,000)	58
第39図	守山大塚古墳 墳丘実測図	59・60
第40図	長崎県内の前方後円墳	63

表 目 次

第1表	長崎県の前方後円墳・調査古墳一覧表	64
-----	-------------------	----

図 版 目 次

図版1	出居塚古墳 墳丘	71
図版2	" 石室	72
図版3	掛木古墳 墳丘	73
図版4	" 石室(1)	74
図版5	" 石室(2)	75
図版6	" 石室(3)	76
図版7	" 石室(4)	77
図版8	" 石室(5)	78
図版9	" 遺物(1~5・7は1/3, 10~14は1/2)	79
図版10	百合畑古墳群第1号墳 墳丘	80
図版11	" 第20号墳 墳丘	81
図版12	" 第20号墳 墳丘	82
図版13	笠塚古墳 連景・墳丘	83
図版14	" 墳丘	84
図版15	" 石室(1)	85
図版16	" 石室(2)	86

図版17	帷塚古墳 調査風景	87
図版18	" 遺物出土状況	88
図版19	帷塚古墳出土 土師器・須恵器(約1/3)	89
図版20	" 須恵器・陶質土器(約1/3)	90
図版21	" 金属器(約1/2)	91
図版22	双六古墳 墳丘	92
図版23	" 石室(1)	93
図版24	" 石室(2)	94
図版25	" 石室(3)	95
図版26	対馬塚古墳 墳丘(1)	96
図版27	" 墳丘(2)	97
図版28	観上山古墳第1号墳 墳丘	98
図版29	" 第1号墳 石室	99
図版30	大原天神の森1号墳・2号墳 墳丘	100
図版31	" 2号墳 墳丘	101
図版32	岳崎古墳 遠景・墳丘	102
図版33	" 墳丘	103
図版34	守山大塚古墳 墳丘	104
図版35	" 墳丘	105

第1章 はじめに

長崎県内には、古墳の数がかなり少ない。九州北部の佐賀県や福岡県に比べ、その差は顕然たるものがある。そのうえ、古墳の分布に相当の偏りが認められ、半数以上が壱岐にある。前方後円墳の分布と偏りについても、同様である。このことについては最後のまとめの項で触れたい。県内における古墳の調査も、他県に比べて著しく少ない。古く江戸時代に幕府の命により、平戸藩主、松浦公によって壱岐の古墳の状況と数が調べられたのを始めとすれば、第二次世界大戦前には、調査らしいものではなく、古墳についての記述や報告は見られるが、発掘調査の例は知られていない。正式な古墳の発掘調査は、1953年からの、東亜考古学会、九学会などによる対馬での調査が最初であろう。その時は、高原式の古墳として、大将軍山古墳、シタル万人塚、曾ワジマ古墳、根曾古墳群、出居塚（鶴ノ山）古墳、保床山古墳の調査が行われている。壱岐では古く江戸時代の末期、安政2年（1855）に偶然知られた大塚山古墳の掘られた経緯と、出土した須恵器が伝えられている。この古墳については1982年に、壱岐郡文化財調査委員会によって石室の実測が行われ、墳丘の調査が県文化課によって実施されたあと、長崎県指定の史跡となっている。壱岐ではこのほか松尾古墳群、カジヤバ古墳、鬼ノ岩屋（矢櫃）古墳などが調査されている。本土部では、北松浦郡の笠松天神社古墳、大村市の黄金山古墳、玖島崎古墳群、南高来郡の高下古墳、柿ノ本古墳、一本松古墳、長崎市の曲崎古墳群の一部が発掘調査されているに過ぎない。この外、遺跡の整備事業に伴う調査が東彼杵郡のひさご塚古墳、西彼杵郡の前島古墳群、北高来郡の長戸鬼塚古墳、丸尾古墳などで行われ報告書が出されている。今までの整備事業に伴う調査では、石室の清掃と図化、墳丘の確認程度であった。

以上のように、今まで古墳の発掘調査は非常に少なく、墳丘や石室の検討や比較ができるだけの資料が絶対的に不足で、広く活用できるような状況ではなかった。ただ、壱岐の一部の熱心な人々は、島内の古墳についての形や規模を記録し、公表している。⁽¹⁾このような状況から学術面のみならず、広く文化財について知ってもらうための第一歩として、県内の古墳のできるだけ正確な記録を作成することを目的に、今回の調査となったものである。

平成元年度から3年度までの3か年にわたり12基の古墳について調査を実施し、ここにその報告をする運びとなったものである。

本文中にも記されているが、この調査で新しい事実や興味深い問題も出てきており、まだ多くの資料の蓄積と公開が望まれるところであるが、この報告書は一応の区切りと考えたい。

（藤田）

註1 松永泰彦 「壱岐島北部における古墳の現状」『壱岐第15号』壱岐史蹟顕彰会 1981
に墳丘の規模、石室の形態・法量など詳しく記され、壱岐島内の遺跡については
横山 順 「壱岐の古代と考古学」『玄界灘の島々』海と列島文化3 小学館 1990
に詳しい。



今回調査の古墳

名 称	所 在 地
1 出居塚古墳	下原郡美津島町
2 漢木古墳	壱岐郡勝木町
3 百合畠古墳群1号墳	壱岐郡勝木町
4 百合畠古墳群20号墳	壱岐郡勝木町
5 鐘懸古墳	壱岐郡勝木町
6 双六古墳	壱岐郡勝木町
7 芝馬塚古墳	壱岐郡勝木町
8 船上山古墳群1号墳	壱岐郡芦辺町
9 大原天神の森1号墳	壱岐郡都ノ浦町
10 大原天神の森2号墳	壱岐郡都ノ浦町
11 鷲崎古墳	北松浦郡由平町
12 守山大塚古墳	南高来郡佐世保町

(古墳名は筆者による)

その他県内の前方後円墳

名 称	所 在 地
13 横勇1号墳	下原郡美津島町
14 横勇2号墳	下原郡美津島町
15 横勇4号墳	下原郡美津島町
16 百合畠古墳群3号墳	壱岐郡勝木町
17 百合畠古墳群14号墳	壱岐郡勝木町
18 百合畠古墳群15号墳	壱岐郡勝木町
19 炒糸寺1号墳	壱岐郡芦辺町
20 山ノ神1号墳	壱岐郡芦辺町
21 船上山古墳第2号墳	壱岐郡芦辺町
22 笠松天神社古墳	北松浦郡由平町
23 ワレ椎現塚古墳	東彼杵郡東彼杵町
24 ひさご塚古墳	東彼杵郡東彼杵町
25 石走古墳群1号墳	大村市
26 茅屋の辻古墳	大村市

長崎県



佐賀県



第1図 調査古墳・県内前方後円墳位置図

第2章 調査

・調査の概要

ここでは、各年度ごとにそれぞれの古墳の調査について、簡単に記しておきたい。

平成元年度は、壱岐勝本町の掛木古墳、笠塚古墳、郷ノ浦町の大原天神の森1号墳、同2号墳の4基の古墳を対象とした。掛木古墳は、壱岐島の中央近くにあって、石棺をもつことで古くから知られていた。石田・郷ノ浦と勝本を結ぶ国道382号線に面して位置している関係や、駐車場があるところから観光客の出入りも多く、よく知られている古墳である。一方、笠塚古墳は掛木古墳の南南東約500mの場所に位置し、江戸時代から神代の文字があると伝えられた古墳であるが、小さな谷間の低い場所に面し、道路からも見えにくく、あまり人の寄り付かない古墳である。両古墳は、6月21日から同時に調査にかかった。ところが、笠塚古墳では思わぬ所から多くの遺物が出土し、結局第1回の調査のあと、再度調査を行った。掛木古墳と第1回の笠塚古墳の調査と入れ替わりに、大原天神の森1号墳、同2号墳の調査が行われた。

平成2年度の調査は、南高来郡吾妻町守山大塚古墳、壱岐芦辺町の巖上山古墳、勝本町の双六古墳、百合畠古墳群第1号、同20号の5基の古墳が対象であった。11月に守山大塚古墳の墳丘測量を実施したが、この古墳はほぼ全面が墓地として使用されており、旧地表面を残しているところは皆無に等しい状況であった。さらに、墓城を平らにするため、斜面の至る所に石垣やコンクリートブロックが積まれ、林立する墓標のため調査は難行した。調査に費やした労力に比べ、完成した図では古墳の大きさが従来いわれていたより小さすぎる気さえした。前方面部を削りとられた結果とも考えられる。壱岐の4基のうち、双六古墳の墳丘測量によって、基壇をもつ古墳であることが確認され、本古墳が長崎県で最大規模の前方後円墳であることが判明した。また、基壇のある墳丘や石室の構造について、笠塚古墳と類似する点が認められ、両古墳の関係について、興味を引かれる様相を示している。この点は、まだ調査の範囲を広げ、他にそういう存在がないか、確認する必要を感じさせることとなった。巖上山古墳、百合畠古墳群第1号墳、同20号墳は形の小さな古墳で、墳丘の測量のみを行った。

平成3年度には、北松浦郡田平町の岳崎古墳、下原郡美津島町の出居塚古墳、壱岐勝本町の対馬塚古墳の3基が対象となった。田平町の岳崎古墳は、壱岐水道に面した丘陵上に位置し、同町の対馬天神社古墳とならんで九州で最も西の前方後円墳と考えられてる。壱岐水道や九州北岸を活躍の場としていた首長の墓城と思われる。出居塚古墳は、昭和20年代の調査のときは、古墳へ案内した人の名前との間違いから「鶴の山古墳」として報告され、それ以来その名で通用していたが近年元の名称を使用することとなった。この古墳は、調査時から前方後方墳の可能性がいわれ、近年まで論議が続いていたが、最終的に前方後円墳であろうとの結論に達した。対馬塚古墳は墳丘の測量を行ったが、前方後円墳の形はさほど明瞭ではなかった。

(藤田)

1) 対馬

・出居塚古墳

出居塚古墳は、対馬東海岸の下県郡美津島町雑知浜田原陰にある。雑知浦の最深部の丘陵の先端部、通称「エビスガクマ」と呼ばれる丘陵があり、標高約50mほどの場所に位置していて、眼下に雑知浦を見渡すことができる。この古墳のある丘陵の裾の部分を、西方から北側にかけて雑知川が東に逕り、やがて南に向きを変えて雑知浦に注いでいる。雑知川によって作られた平地が、この丘陵を取り巻いているとも表現できる。平坦な地形に乏しい対馬で、ここはかなり開けた場所であった。(第2図)

ここから東へ1kmほど離れた雑知浦の北岸に出た台地上に、前方後円墳3基を含む6基で構成される根曾古墳群が知られている。^(註2)この古墳群は、中央の政権がここに遷したことの表れとも考えられており、対馬で数少ない前方後円墳を含む古墳群であることから、昭和51年に国指定の史跡となっている。

本古墳は、古くは「出居塚」と呼ばれていたが、1951年の東亜考古学会による調査のおり、案内者の名前から誤って「鶴の山」古墳と命名されていたが、現在では「出居塚」と呼称している。古墳は山林で、前方部の東西両側は近年まで畠として使用されており、今は笹や草が繁茂している。



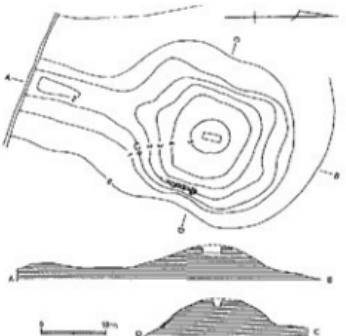
第2図 出居塚古墳の位置と周辺地形図(1/25,000)

1951年1月、東亞考古学会により所在が確認されている。^(註3)しかし、その時点では時間の都合上、調査はされていない。同年7月、九学会連合対馬共同調査隊に上り、発掘調査が行われて^(註4)いる。

墳丘 墳形は、封土による前方後円墳とされており、後円部東側の急斜面に一部積み石が確認されている。封土を築くためのものと考えられている。

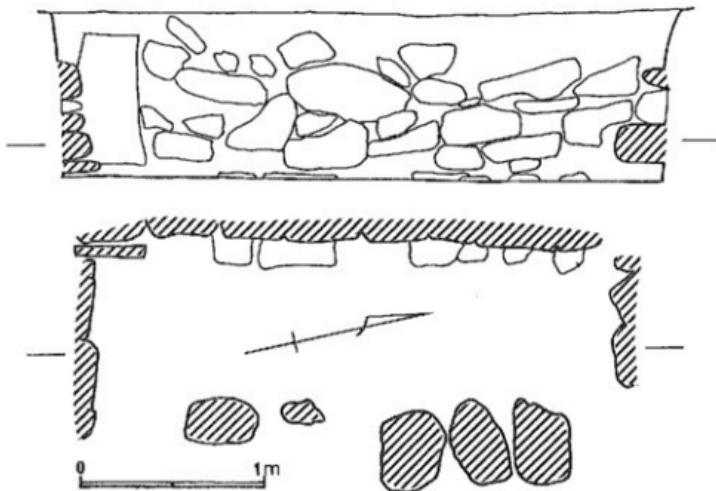
主体部は「現在では石棺を構成する板石の大部分が缺失しており、全體の形状は不明となっているが、表面の隅にその一部が折れ残っているのでそれと判定できた。」として組合箱式石棺とされている。また、板石がない状態では、石室のように見えるが、石棺の根固め石であるとされている（第4図）。

遺物は、有茎柳葉式の銅鏡が12本出土している。そのうち6本は石棺の北壁寄りの場所から、他の6本は南壁寄りの處から出土している。これらの銅鏡は、年代的にも系統的にも畿内前期古墳文化を外れるものではないと



『対馬の自然と文化』1954より作成

第3図 出居塚古墳墳丘実測図



『対馬の自然と文化』1954より作成

第4図 出居塚古墳石室実測図

されている（第5図）。その他、出雲石製で、長さ1.7cm、径0.5cmの管玉が一個と、破片のため数および大きさは不明であるが、鉄剣及鉄刀が少なくともそれぞれ2口分出土しているものと推定されている。また、頂上部に近い処から上器の小破片が一部出土している。「器表、外観は埴輪の破片とも見られるが、器壁が薄く、裏面も研磨の痕がみられるので埴輪⁽¹⁶⁾として疑問が持たれる。不明の土製品としておく他ない。」とされている。

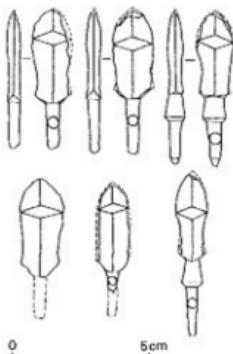
今回の調査は時間的な制約もあり墳丘の測量しか実施出来なかつた。測量は、縮尺100分の1、等高線は50cm間隔で実施した。墳丘の形は、これまで前方後円墳とも前方後方墳ともいわれて來たが、今回の調査によって県内では初例の前方後方墳であることが明らかとなつた。

主軸の方向は北から30度程東にずれ、南南西を向く。墳形の特長はほぼ正方形の後方部に手鏡状の細長い前方部が付いている（第6図）。但し、前方部の東西両側は近年まで畠とされており、それによる開墾によって細く削られた可能性が強く、発掘調査によって確認しないと正確なところは分からぬが、今回行った墳丘の測量では、前方部のまえ半分に東西に膨らむ形跡がうかがえる。墳丘の規模は、全長40m、後方部の高さが3.7m、くびれ部の幅が7m、くびれ部の高さ1m、前方部の長さ21m、幅4m、高さ1.2mで、後方部径と前方部の長さの比率は約1.11、後方部径と前方部の幅の比率は約0.21である。尚、後方部の北東・北西・南西の3隅には測量の折り、ポールを立てた時に大きめの疊が敷いてある状況がうかがえ、葺石の残存ではないかと思われる。墳丘の清掃をし、葺石であるかどうかの確認とその範囲を速やかにおさえが必要があるであろう。

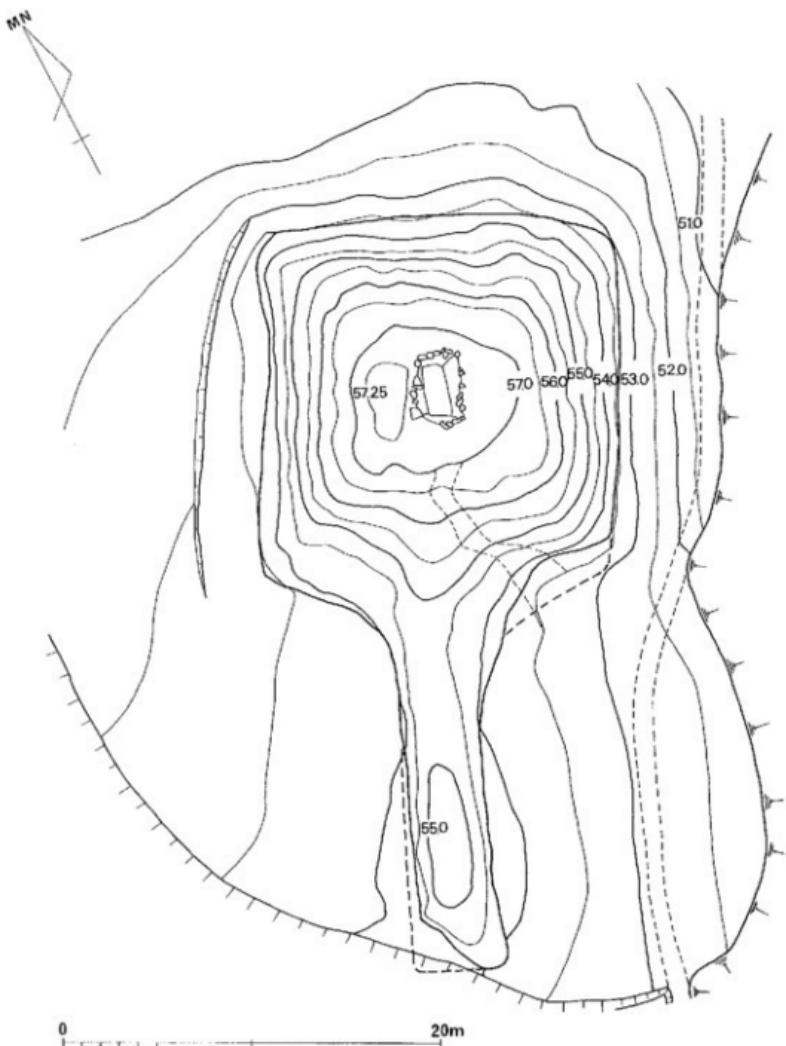
石室 前述のように1951年の九学会の報告では主体部は組合箱式石棺であり、石室ではないとされているが、現状をみると人頭大の疊を積んで竪穴式石室を造っているよう見える。特に西側の壁が一番残りが良く、下のほうでは敷地面がきちんと揃えられている状況が確認できた。蓋石もなく石棺の板石の残存部の確認もできなかったが、現状では石棺を入れた竪穴式石室と考えて良いであろう。石室の規模は長さ4m、幅2m、深さ0.9mほどである。なお、今回は時間的制約により石室の清掃、実測ができなかつたのが残念である。今後、速やかに機会を設けて石室の調査を実施したいものである。

遺物 今回の調査では墳丘や石室の清掃が出来なかつたため、遺物の採集はなかつた。

このように、出居塚古墳は県内で初めての前方後方墳である。その築造期であるが、丘陵の尾根上に造られているという立地、1951年の調査で出土している銅鏡が古墳時代前期に多く見られる形式であること、主体部が竪穴式石室であることから、古墳時代前期の4世紀後半から



『九州考古学研究』古墳時代編1979より作成
第5図 出居塚古墳出土銅鏡実測図



第6図 出居塚古墳墳丘実測図(1/300)

5世紀初頭頃にかけて築造されたものと考えられ、対馬でも最古の畿内式古墳となる。また、弥生時代から古墳時代を通じて石棺が主要な埋葬形態である対馬において、埴丘を持った墳墓が、難知に出居塚と出居塚に続く時代のものとして根曾古墳群に3基の前方後円墳があり、この地に畿内の政権と関連した豪族が居た事を窺わせ、古事記にある「津嶋縣直」家の墓であるという説もある。
(浦田)

(註1) 『対馬』東亜考古学会1953で報告されている。

(註2) 1号墳は柄鏡式の前方後円墳で全長30mほどで積石がある。巨石を利用した石室は壊れている。柳葉形鉄鎌、鉄刀片、碧玉製玉が出土している。

2号墳は埴丘全面に浜石を積んだ全長36mほどの前方後円墳である。石室は2つあり後円部頂のものからは須恵器、鉄刀片が、くびれ部のものからは土師器、鉄劍が出土。なお、前方後円墳の可能性もある。

3号墳は巨石を使用した横穴式石室が露呈し、天井石、積み石はない。墳形・規模などは不明。

4号墳は積石のある前方後円墳と考えられているが、現在は墳形不明。

5号墳は積石のある小円墳で、須恵器出土。

6号墳は積石が散乱し、封土もない。

(註3) 註1と同。

(註4) 『対馬の自然と文化』九学会連合対馬共同調査委員会1954に記載。

(註5) 註4と同。

(註6) 註4と同。図面・写真等の記載がないため何であるのか判断ができない。

(註7) 出居塚が4世紀後半から5世紀初頭、根曾1号墳が5世紀、根曾5号墳が6世紀後半から終末、根曾3号墳と、出居塚から南西に約500mほどの高浜の丘陵上にあるサエノヤマ古墳が7世紀頃のものと考えられ、対馬でも難知周辺に埴丘をもつ古墳が4世紀後半から7世紀にかけて存在する。なお、サエノヤマ古墳は直径約10mの円墳で、漢道、玄室の区別のない横穴式石室をもつ。

(註8) 『古事記』天照大神と須佐之男命の条、建比良島命の分注に「比山雲國造、无邪志國造、上菟上國造、下菟上國造、伊自牛國造、津嶋縣直、遠江國造等之祖也。」とあり、神話の域ではあるが、これをそのまま解すると津嶋縣直は大和の政権を興した皇族の子孫ということになる。しかし、津嶋縣直(あたへ)という姓からして、大和政権に直接支配された地方豪族ということになるであろう。

参考文献 『對島』東亜考古学会1953年

『対馬の自然と文化』九学会連合対馬共同調査委員会1954年

小田富士雄「対馬の古墳文化」『九州考古学研究』古墳時代篇

第二部第17章2 1979年 學生社

『古事記訳詞』日本古典文学体系I. 1958年 岩波書店

2) 巻 岐

湯本地区の古墳は、巻岐島の中央よりやや北西に偏って分布する。本事業で調査の対象とした12基の古墳の半数の6基の古墳もここにある。

1は掛木古墳で、横穴式石室をもった円墳である。国道に面していることもあり、見学の人が多い。2は百合畠古墳群第1号墳で、小形の前方後円墳である。墳丘の北側が削られ、また前方部分の先端も、国道の工事に伴って削られたものと思われる。3は百合畠古墳群第20号墳で、これも小形の前方後円墳である。墳丘の一部が削られ、石室材と思われる石がわずかに見える。4は笠原古墳で、南を除く三方を低い水田に囲まれているが、水田の回りの部分が高いため、目につきにくい。5は双六古墳で、芦辺町との境に近い場所にあり、後円部の頂上からはかなりの視界が得られる。6は対馬塚古墳は、以上の古墳の中心に近い亀石から南西に2kmほどあり、立地の条件がやや異なっている。7と8とは巨石を使った横穴式石室をもつ古墳で、7は通称「鬼の岩戻」と呼ばれている矢櫃古墳で、墳丘の直径45m、高さ13mの円墳である。この古墳から出土した須恵器は、6世紀後半から7世紀前半に位置づけされている。8は兵瀬古墳で、14mほどの石室がある。8の兵瀬古墳の北西側に、百田^{ひやた}古墳群として8基の古墳が知られ、北側には釜嵩古墳群7基がある。7のすぐ南に、京塚山古墳群として7基の古墳がある。掛木古墳の北東側には布氣古墳群があり、亀石古墳群や双塚古墳群なども散在している。

(藤田)



第7図 巒岐島中央部の主要な古墳分布図 (1/25,000)

・掛木古墳

位置と環境

本古墳は、壱岐郡勝本町布氣触字掛木に所在し、標高101mほどの丘陵に立地する円墳である。周辺一体の丘陵は、県内で最も古墳が集中して分布する地域であり、布氣古墳群や百合畠古墳群などの古墳群が展開し、本墳の南方500mに笠塚古墳、南方1kmに双六古墳、南東1.2kmに鬼の宿古墳などの大形墳が存在する。また、本墳は野ノ浦から勝本浦へ向かう国道382号線沿いにあって、史跡巡りの観光ルートに組み込まれている関係から、土曜や休日にはバスで多数の見学者が訪れる場所としても著名な所である。本墳は、掛木家の北風を避けるための背戸山であったが、調査後墳丘に芝生を貼り、石室に照明を備え、古民家とともに「壱岐風土記の丘」として勝本町教育委員会が整備し、観覽に供されている。

調査

今回の調査は、遺跡保存の基礎資料を得るために、古墳の内容・規模を把握することが目的であり、樹木を伐採し墳丘の平板測量(1/100)と石室の実測(1/20)を行った。石室は、石棺の基部と床面の状況を調べるために部分的に掘り下げ、古墳時代～近世の遺物が74点出土した。

墳丘（第9・10図）

墳丘は、遠方から見ると丸く典型的な円墳状をなしているように見えるが、測量の結果、南北22.5m、東西18m、比高6.8mを測り、裾と周縁がかなり削り取られていることが分かった。裾の残存状況や等高線の走行状況などから判断すると、本来は直径が28～30mほどの規模をもつた円墳であったことが推測される。厳密な規模については、今後の調査に期待したい。

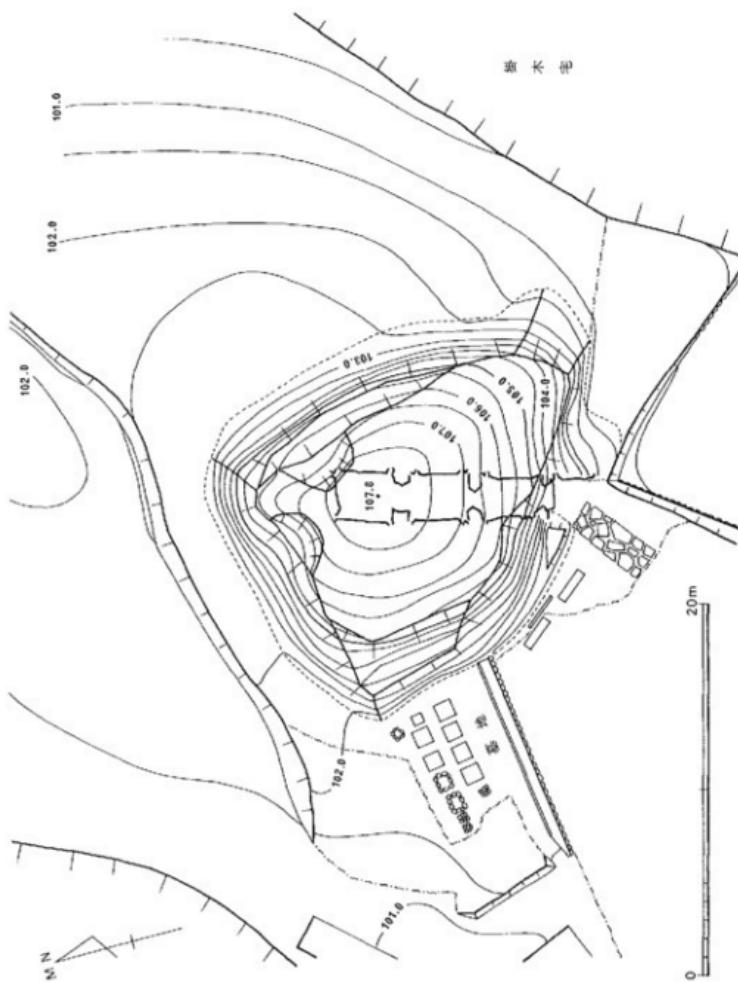
石室（第11図）

石室は、南に開口する横穴式石室で、前室、中室、玄室に分かれた複室構造をなし、各室は青礫石で区切られており、石室全長は13.6mを測る。石室の主軸は、磁北でみると15°東へ振れている。玄室は長さ3m、幅2.6mのややいびつな長方形をなし、奥壁側に剥抜式の家形石棺が据えられている。奥壁、腰石とともに3mほどの大石を用い、長さ2m、幅1mほどの石を横に据え、若干持ち送り気味に積み



第8図 掛木古墳周辺地形図（上のアミ目 掛木古墳、下のアミ目 百合畠古墳群第1号墳（1/5,000）

第9図 指木古墳 墓丘測量図 (1/300)



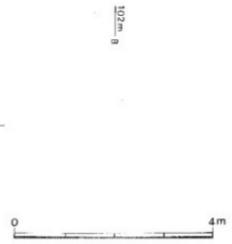
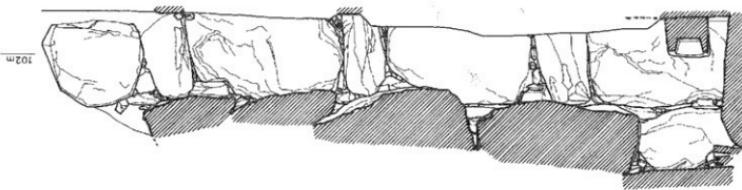
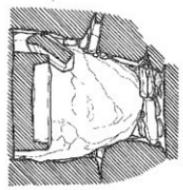
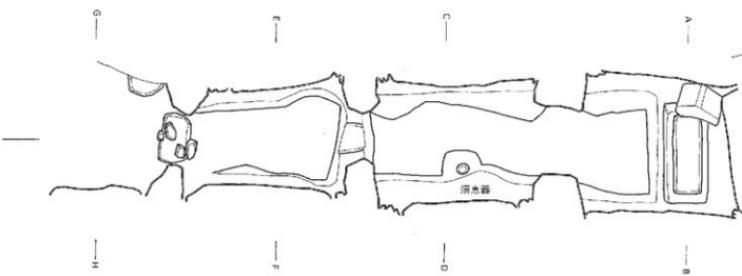
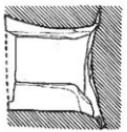
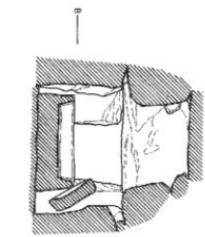
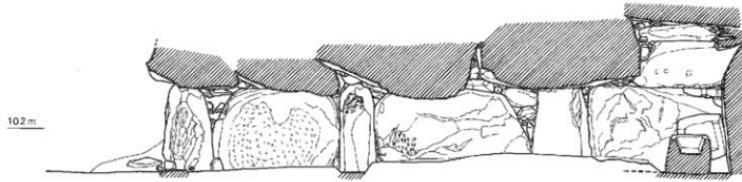
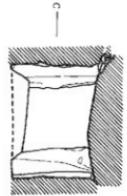
上げ、巨大な一枚石の天井石との隙間には板状の石を詰め込んでいる。床面には板状石が敷かれ、天井までの高さは3mを測る。中室と前室は、長さ3m、幅1.5mほどの石を横に据えて腰石とし、長さ2~3mほどの天井石を羨門側の方から重ねながら載せている。袖石や天井石との隙間には繩が詰め込まれている。両者ともに床面は長方形状をなし、中室は長さ3m、幅2.6m、高さ1.5m、前室は長さ3.2m、幅1.8m、高さ1.7mを測る。前室の入口（羨門）には框石が敷かれ、閉塞石に使用されたと考えられる繩が一部残存している状況が確認された。また、前室と中室の間にも框石が敷かれているところから、掘り下げていない玄室への入口（玄門）にも框石が存在することが予想される。前室人口の東側には、2mほどの石を据え短い羨道部を形成しているが、西側の石は日露戦争の戦没者の墓石として使用するために運び去られている。石室の石材は、やや丸みをもった玄武岩が使用されており、そのためか平坦面を得るために敲打し、アバタ状の凹みやノミ状に具で削った痕跡や打欠が袖石や前室・中室の腰石と天井石に認められる。したがって、石室構築後に石室の歪みや凹凸を矯正するためにかなりの調整加工が施されたことが分かる。

石棺

石棺は、灰白色の色調の地元産の凝灰岩を利用した削抜式の家形石棺である。管見する限り島内でも類例を聽かない。蓋石は、その半分以上を失っており、棺身の西側小口部分に立て掛けて置かれている。星根形をなし、長さ87cmほどが残存して、幅94cm、高さ35cmを測り、内側を10cmほど削抜いている。棺身は、長方形を呈し、外法が長さ190cm、幅95cm、高さ70cm、内法が長さ150cm、幅46cm、深さ30cmを測り、ぶ厚くがっしりした棺体の割に削抜きが浅く、小形である点が注目される。被葬者は、若年者か小柄な人であったのだろうか。江戸時代の文献である『毫岐名勝図誌』に紹介のある石櫃の絵図は、現在の姿とほとんど変わっておらず、古墳の開口が江戸時代にさかのぼることが明白である。



第10図 江戸時代末期の掛木古墳（毫岐名勝図誌から）



第11図 掛木古墳 石室実測図 (1/80)

遺物（第12図）

石室を部分的に掘り下げた際に、土器、銅鏡片、金環、鉄製品などが出土している。

上器には、土師器と須恵器がある。1は、全体の1/4ほどが残存する土師器坏である。推定復原では、口径16.1cm、器高4.1cmを測る。底部から体部は丸味をもって立ち上がり、口縁は擒み気味におさめ外方に沈線が巡る。体下半を横位のケズリの後に体部は横位のミガキが施され、口縁付近はヨコナデ調整される。内面は風化を受け著しく器表が剥落しているが、わずかに残る器表には放射状のミガキが観察される。明赤褐色の色調で、胎土は赤色砂を若干含むが精良で、焼成は良好でしっかりしたつくりである。畿内系土師器の可能性をもっている。玄室出土。

2～9は、須恵器である。2～5は环蓋で、2～4は丸い天井部から口縁へカーブを描く形態のもので、5は身受けかえりを有するものに分かれ。2は、口径10.8cm、器高3.7cmを測り、口径の割に高めの形状をもつ。内面から体部付近は回転ナデ調整、内面天井部には静止ナデを施すが、天井部は指で整形したままになっている。赤褐色を呈し、1～2mm大の石英砂を含むが、焼成良好である。内面天井部には部分的に丹が付着している。後述する3・4と形態やヘラケズリを施さないなどの点で異なり、环身の可能性ももっている。中室出土。3・4は天井部をろくろ右廻りのヘラケズリを行い、体部から内面にかけて回転ナデ調整し、内面天井部には静止ナデを施す。また、天井部にヘラ記号がみられる。両者ともに灰色を呈し、小石英砂を含み、3は焼成良好、4は焼成普通である。3は口径11.3cm、器高3.3cmを測り、4は口径12.2cm、器高3.8cmを測る。3は中室、4は前室出土。5は、身受けかえりが極くわずかに出る环蓋で、天井部を欠失しつしまみの有無は明瞭でない。天井部はろくろ右廻りのヘラケズリ、口縁付近は回転ナデ、内面は静止ナデを施す。天井部にはヘラ記号を入れる。灰色を呈し、1～3mm大の石英砂を含むが焼成良好である。中室出土。

6～8は、受部から立ち上がりが内傾し、端部を丸くおさめる环身である。6・7は、体部内面から外面にかけて回転ナデ調整し、内底面には静止ナデを施すが、底部はヘラケズリを施さず粗いつくりになっている。底部にはヘラ記号がみられる。両者は灰色を呈し、小石英砂を含み、焼成は普通。6は、口径12.2cm、器高4cmを測る。7は、完形品で口径11cm、器高3.6cmを測り、全体に鉄分らしきものが付着し茶色味を帯びている。8は、6・7に比較すると薄手のつくりで、体下半を欠失し、内外面ともに回転ナデ調整される。黒灰色の色調で、器肉は赤褐色を呈する。1～2mm大の石英砂を含むが、焼成良好である。6～8は、中室から出土している。

9は、器台の撤去部と推測されるぶ厚い破片で、低い突帯の上下にヘラによる連続の直線文と斜線文を描いている。外面は黒灰色、内面は灰褐色を呈する。1～2mm大の石英砂を含み、焼成は普通。

ここで土器についてまとめてみよう。土師器坏は、底部を欠失しておりラセン状のミガキは明瞭でないが精緻なつくりで、畿内からの搬入品とされている芦辺町カジヤバ古墳出土の坏と

(註3)

類似している。畿内系と仮定すれば、西弘海氏の分類でいう環CI類で、径高指数は26を示し、飛鳥III期（7世紀中頃）に最も近い資料となる。須恵器は、环蓋2～4と环身6～8が小田富士雄氏編年（15）のIV期、环蓋5がV期に相当し、6世紀末～7世紀前半の資料である。

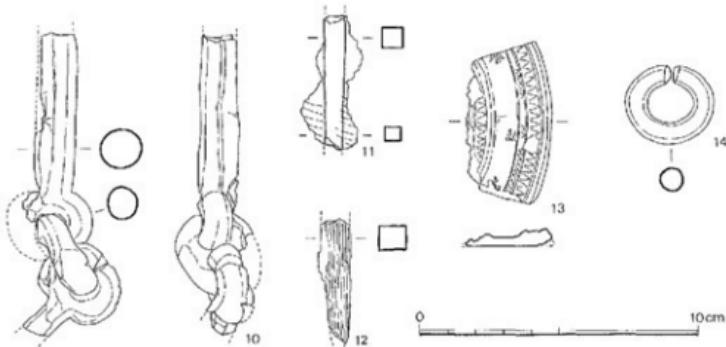
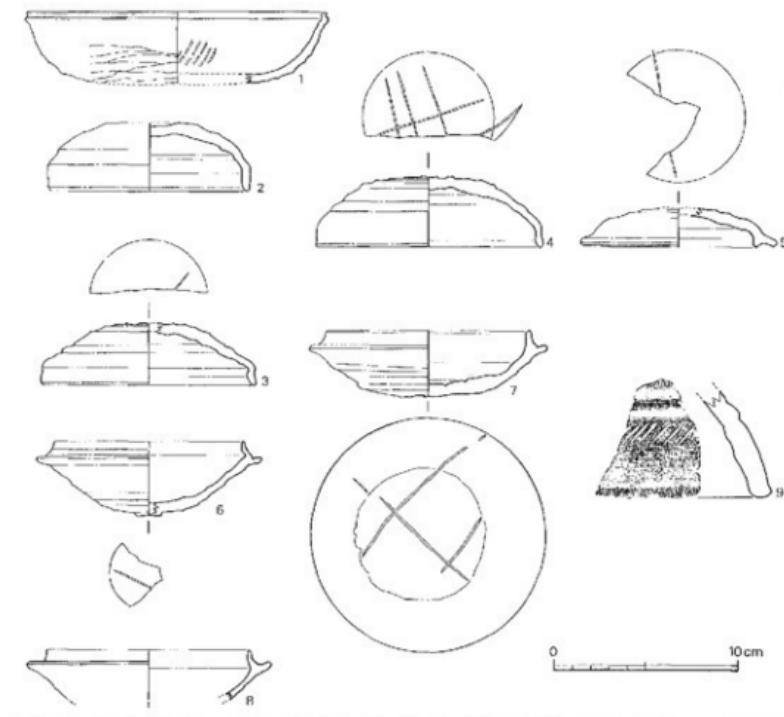
10～12は、鉄製品である。10は、馬具の轡であり、遊環によって引手と銜が連結しているが他大半を欠失している。11・12は、断面角形の鉄釘である。両者ともに上・下端を欠失しているが、11は横方向、12は縦方向の木質が付着し、木棺の釘と考えられる。10は中室、11は玄室から出土している。13は、銅鏡の外区部分である。凹帯鏡面文縁で、凹帯部は銘帯になっているが、風化が著しく銘文は明瞭でない。復原推定径は、15.4cmを測る。鏡片は、中室から6点前室から1点の計7点が出土しているが、いずれも風化が著しく脆くなっている。内区部分の破片には、半肉彫の獣形文と乳状の突起とおぼしき文様が認められるところから、彷彿した獣鏡の一種と考えられる。14は、中室から出土した金環である。銅心金箔であり、長さ3.1cm×2.8cm、径0.8cm、重量19.9gを測る。

この他に、後世の混入品として、13世紀後半～14世紀前半代の中国製錫手運弁文青磁碗片、近世陶磁器片、寛永通宝5枚、キセルの部品3点などがみられる。江戸時代の文献『志岐名勝図誌』には本墳の石棺が描かれ、江戸時代にはすでに開口していることが明らかで、近世遺物はそのことを物証的に裏づけるが、中世の青磁は開口された時期があるいは中世まで遡るのでないかと興味を抱かせる資料である。

まとめ

以上、今回の調査成果について述べてきたが、ここで本墳の特長・性格などについてまとめを行いたい。本墳は、三室の複室構造の横穴式石室を内部主体とする径28～30mほどの円墳で、出土遺物の年代観から6世紀末頃には築造され、7世紀中頃まで追葬されていたことが推察される。遺骸埋葬施設は、刳抜式家形石棺を玄室に据え、また鉄釘の出土から木棺が追葬されたことが考えられる。家形石棺は、島内はもちろん県内での類例も知られていない。地元の凝灰岩を用いているとはいえ、性格的には外在的要素が強いように思われる。木棺は、芦辺町のカジヤバ古墳でも確認され、7世紀代には島内である程度普遍的な施設であった可能性をもっており、今後の調査に期待する所が大きい。遺物では、畿内系土師器と推測される環が注目される。九州本土では極く少量しか出土していないが、島内ではカジヤバ古墳、笠塚古墳（15）でも出土しており、調査件数が少ない割に確率が高いことが指摘される。7世紀代の古墳の被葬者層と畿内の中央政権との強い結びつきが看取できるのではないか。後期古墳の爆発的な増加と古墳造営層の拡大が単なる内在的発展であったとは考えがたく、その契機として中央勢力の政治的な外在的要因があったことが想起される。

本墳の周辺には、帷塙古墳、鬼の窟古墳、兵瀬古墳などの複室構造の長大な横穴式石室をもつ大形円墳が存在するが、時期的には重複し、酷似した石室構造をもつところから、技術的な面で強い関連があったことが考えられる。それらの大形墳は、時期的に前方後円墳の築造が



第12図 掛木古墳出土遺物実測図 (1/3・1/2)

終焉し、律令体制に組み込まれていった壇場の首長や有力豪族の墳墓であったことが推察される。本墳は、規模的にみると大形墳の下位に位置し、大形墳の被葬者と親縁的な関係にあった人の墳墓ではないかと想定される。

壇場の古墳研究は、基本資料が整備され始めた段階である。今後、調査が進めば未解決の問題が解明され、具体的で豊かな歴史像が描かれていくと思われ、資料の蓄積に期待したい。

(宮崎)

註1 前室を羨道として、中室は前室、玄室を後室の三室構造としてみる考え方もあるが、前室と中室が同様の形態をもつこと、前室の入口が袖石を立て框石を敷き門の構えをもち、入口両側に据えられた石が羨道を形成していると考えられることなどから、ここでは前室・中室・玄室の三室とした。

註2 山口麻太郎『壇場国史』第一法規出版

註3 本田秀樹・副島和明『カジヤバ古墳』芦辺町文化財調査報告書第3集 芦辺町教育委員会 1988

註4 西弘海他『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所 1978

註5 小田富士雄他『八女古窯跡群調査報告Ⅰ～Ⅳ』八女市教育委員会 1969～72 他

註6 調査担当 藤田和裕氏教示。「本書」に所収。

・百合畠古墳群第1号墳

本古墳は、老岐郡勝木町百合畠触520-1番地外に所在する前方後円墳で、亀石の北方に群集する百合畠古墳群の西端に位置している。百合畠古墳群は標高90~110mほどの丘陵に展開し、南北300m、東西250mの範囲に拡がっている。小規模な前方後円墳5基と横穴式石室を内部主体とする円墳18基から構成され、時間的な幅をもつことが予想されるが、発掘調査が実施されておらず、詳細な内容については明瞭でない。百合畠古墳群のなかでの前方後円墳は、本墳より北東約50mに第3号墳、東方約180mに第14号墳・第15号墳、南方約90mに第20号墳が存在している。なお、先述した掛木古墳は、本古墳の北方300mに満たない場所にある。

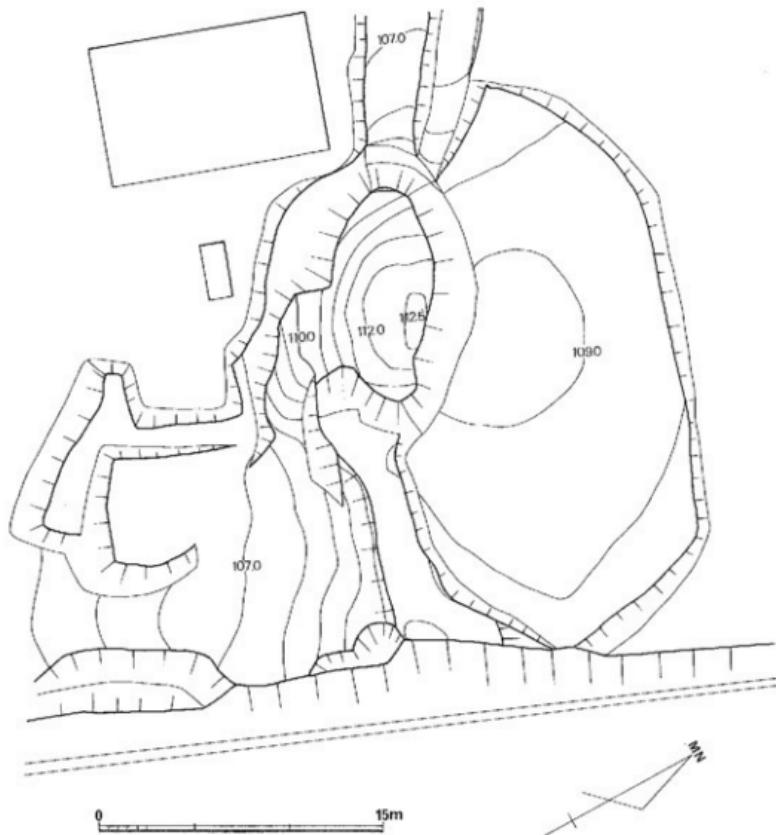
また、本古墳から南東250mほどの場所に笹塚古墳があるが、深さ20mほどの狭い谷によって隔てられている。

填丘（第14図）

本墳は、標高112.7mを墳頂とする小高い丘陵に立地し、森山宅裏の北風を避ける背戸山の樅林になっている。墳丘は、周囲を、畠地、宅地、国道382号によつて削り取られ、墳頂部付近と前方部南側に原形を留めているに過ぎない。現存長は、26.5mを測るが、前方部の端が削られているので、旧状は30m以上の長さを有していたことが推測される。後円部は、残存部の等高線の状況から推定すると径20mほどの規模をもつていたようである。現状の比高は、後円部先端の基底が標高108mを測るので、その高さを基準



第13図 百合畠古墳群第1号墳(左上)、第20号墳(左下)
笹塚古墳(右)周辺地形図(1/5,000)



第14図 百合畠古墳群第1号墳 墓丘実測図 (1/300)

とすると、後円部が4.7m、前方部が1.6mを測る。主軸の方向は、前方部南側の等高線の状況から判断すると、破北から70°～75°西に傾いているようである。前方部南側の状況からみると楔形に開く形状のようである。

前方部の長さと幅、くびれ部の幅などについては、破壊が著しく現状では判断ができない。今後、発掘調査を実施すれば、不明部分の解明の糸口が発見されることが考えられる。葺石や周溝、埴輪については現状では認められなかった。

石室

後円部は半分ほどが削られた状況であるが、石室は露出していない。内部主体は、横穴式石室でなく、箱式石棺、木棺、堅穴式石室などの小規模な埋葬施設が予想される。

遺物

今回の調査において遺物は採集できず、また過去に遺物が出土したという知見は聞かない。

まとめ

本墳は周囲の破壊が著しく、形状を復原するのは難しいが、前方部が楔形に開く古いタイプの形態をもっているようである。内部主体が横穴式石室でないこと、立地的に小高い丘陵に築造されていることなどを考慮にいれると、古墳時代前期の古墳である可能性が強いと考えられるが、資料的に厳密性に乏しい。問題の解決には、今後の発掘調査に期待したい。

(宮崎)

参考文献 松永泰彦「壱岐島北部における古墳の現状」『壱岐第15号』壱岐史蹟顕彰会
1981

・百合畠古墳群第20号墳

本古墳は、勝本町百合畠に所在する。百合畠地区は、壱岐島のほぼ中央部に亀石の地名がある。国道と県道の交差する地区で、周辺には23基の古墳が群集している。その1つが今回測量を実施した古墳である。現地は、亀石交差点から北へ300mほど行った右側の雜木林で、標高が106mほどである。

これまで、壱岐の島には古墳が多く存在することは知られていたが、正確な基数及び墳丘測量図についてではないに等しく、ただ壱岐史跡顕彰会の松永泰彦氏の労作である「壱岐島北部における古墳の現状」をたよるより手立てがない状況であった。この中で調査計測された本古墳の計測値は、前方後円墳で墳丘の長さが26mほどあり、主軸を東西方向に構築していることが知られていた。

調査の概要

現状は、椿・櫻の木等の雜木林が生い茂り調査に入るにはこれらの伐採が必要であった。このため現地の薪払い及び地主からの承諾を事前に得て調査にはいることとなった。

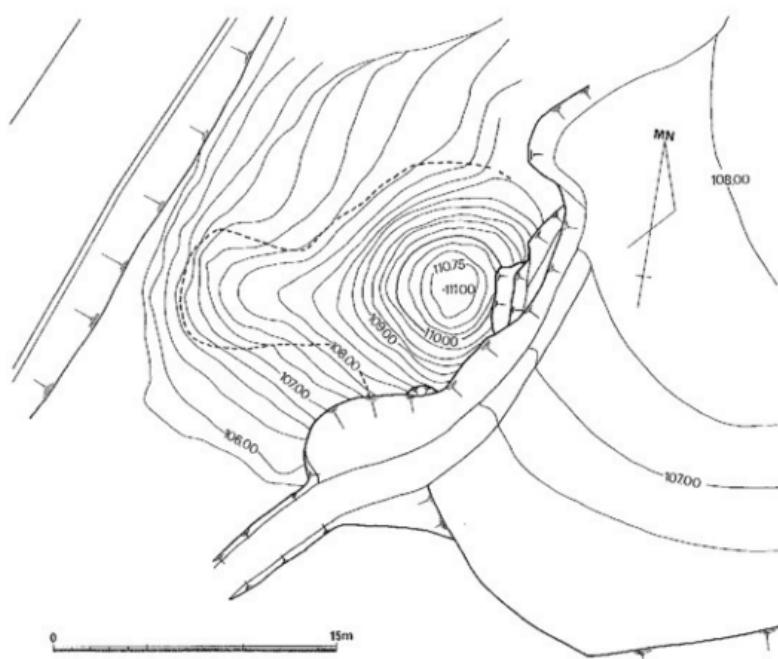
調査は、平成2年3月12日より始めた。墳丘頂上の後円部と前方部の中心に基準杭を設定し東西軸を長軸とした。これと併行して標高の移動を行った。墳丘の形状は、南側の部分が畠地に機械を入れるための脇道造成を行う際に土取りによって削り取られ、約1/5程度が壊されていた。

墳丘（第15図）

全体的な形状は後円部が瘤状に突きあがり、前方部はくびれ部が緩やかでやや幅が広く、なだらかな傾斜をなしていた。このため、前方部の輪郭が50cmの等高線では、明確に自然地形と区別がつかないと判断し、25cmの等高線を入れて墳丘図の作成を行うこととした。この標高を記すと105.750m～111.0mの合計22本の等高線が図化できた。土取りによって削られた南側の観察では、葺石の存在は確認できないが、後円部のしたに石棺らしい石材が残っていたが、現状では判断をくだすことができない。

古墳の全長は20mあり、後円部の直径が13.6m、高さ3.25mを測る。主軸方位はN-81°-Eを示す。
（町田）

参考文献 松永泰彦「壱岐島北部における古墳の現状」『壱岐第15号』壱岐史蹟顕彰会
1981



第15図 百合畠古墳群第20号墳 墓丘実測図 (1/300)

・ 笹塚古墳

笹塚古墳は壱岐島のほぼ中央、勝本町百合畠触字笹塚に位置している。芦辺町瀬戸の入江の奥と湯本湾の最も奥まった場所を結ぶ線上にあたる。標高100mあまりの低平な溶岩台地上に築かれたもので、周辺にも同様の石室をもつ大形の古墳や古墳群が散在している。笹塚古墳は南東から北西に向いた丘陵上の、周辺より若干低い場所に築かれている。南側と東側が高く、西側も小さな谷をへだてて高くなっている。「掛木古墳」や「双六古墳」などの古墳に比べ周辺よりやや低い場所に築かれているのは、石室に使用する石材が得やすいことが優先された結果ではないか、と推測される。

石室は、江戸時代にはすでに開口しており、内部の石に文字らしきものが彫られていることが知られていた。このことは吉野秀政の『壹岐國續風土記』に記録として残されている。また、『壹岐名勝図誌』にも岡入りで簡単に紹介されている。その他、江戸時代のものとして、『未完甲子夜話第二』にも図と記録が残され、注意がひかれていたことがわかる。明治32年、『東京人類學雑誌』に八木獎三郎氏の「壹岐に於ける人類學上の調査」が発表された。この報告のなかに、笹塚古墳の石室や石棺の図が載せられている。『壹岐國誌』によると、昭和の初期には文字らしいものはわからなくなっていた、とのことである。

墳丘（第16・17図）

墳丘は、低平な丘陵を底部で直径66mほどに、深さ2m～3mほど掘り下げ、丸く削って、その上に墳丘を盛り上げた形のものであることが判明した。上段の墳丘は、直径約38m、高さ10mほどである。また、上段の墳丘の形は、部分的に角がつくようにも見えるが、土地所有者の話では、墳丘はさらに南西方面に広がっていたとのことで、道路を造る際にこのような形になつたものと考えられる。墳丘の南西側は一部削られ、道路や畑となっているが、ほぼ円状を保っている。墳丘の形態をわかりやすく例えて言うならば、丸いお盆を逆さまにし、その中央に片を逆さまにふせて置いた形に推測される。墳丘の表面には葺石や埴輪などの存在は確認されていない。

(藤田)



第16図 江戸時代末期の笹塚古墳（壱岐名勝図誌から）



第17図 箕面古墳 墳丘実測図 (1/400)

石室（第20図）

石室は磁北から39度東に振れ、ほぼ南西に向いて開口する横穴式石室で、前室・中室・玄室の3室を持つ。篠道部分以外にはいずれも巨大な石を使用しており、現存する石室の全長は約14.8mである。

玄室は、腰石の上に巨石を二段重ね、その上に天井石を1枚のせる。平面プランは、やや縦長の四角形を呈し、腰石から上に積みあげた石は持ち送りにしているため、左右の側壁が内傾している。使用している石材は、石室内部に湿気があるため表面に水滴がつき滑らかな地肌となっている。玄室の高さは約3.5m、奥行3.8m、幅2.7mを測る。奥壁に平行して凝灰岩の組合式石棺（2.0m×1.1m）がある。玄室と中室との間の両脇には、袖石を設置し、玄門を構築していて、幅は約0.95mを計る。その外、玄室内には長さ約2mの長方形を呈した板石が左右の腰石に並行した状況で2枚認められ、石棺の蓋石として利用されていた可能性が考えられる。

組合式石棺は、長軸を東西方向となし石室に直行して配置している。内法で長側が1.53m、小口が0.79m、深さ0.9mを計る。両長側壁に扁平な石をそれぞれ1枚と両小口側にも1枚ずつ用いて石棺を形成している。棺身内部は、既に盗掘により掘り返され、遺物等の出土はなかった。

中室は、それぞれ左右に1枚づつ長さ4m前後の腰石を置き、玄室と前室の袖石の隙間に角礫を入れ込んでいる。入口には、椎石を置き奥行約4.14m、幅約1.85mを計る。西側中央部で、腰石に並行して幅1m、厚さ0.3mの板石を立てており、これに神代の文字が記されているとされるが、調査では何も確認できなかった。天井石は、2枚の石をあて、1枚（長さ約2.5m）は玄室へ約1/3程突出し、他の1枚（長さ4.1m）は袖石部分に端部をあずけた状態で設置している。また、天井石と腰石との隙間にも割り石をあてて補充している。

中室と前室の間には、袖石を構築しその幅は1.2mある。

前室も腰石を左右に1枚づつ設置し、長さ約3.5m前後ある。両袖石の間に椎石を置き篠道をなし、奥行約4.15m、幅1.85m、高さ2mを計る。床面には、扁平な石（0.2～0.7m程）を敷き詰めている。天井石には、2枚（長さ約1.5m）の石を用いて1枚は中室と奥壁上にある天井石とに挟み込まれた状態にある。このため隙間が広くなってしまっており、この間を埋めるため角礫



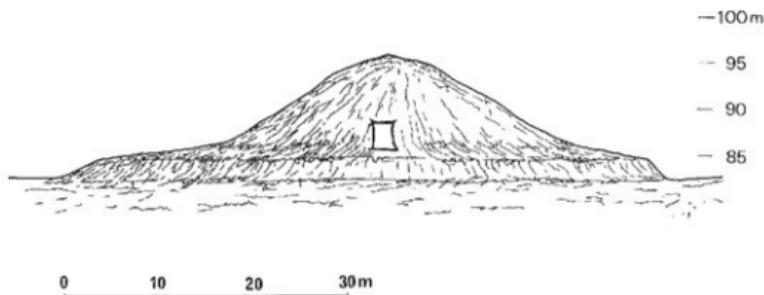
第18図 笹塚古墳石棺の図（奈良名勝図誌から）

を入れ込んでいる。この外、前室には、閉塞石（1.9m×1.1m）と見られる凝灰岩の長方形をした扁平な石が倒れている。また、前室と中室の天井の高さは、床面敷き石から約2mにはほぼ水平レベルを保たれている。羨道近くは、外気に常時触れているためか、腰石の風化が進行し脆くなっている。羨道は、2mほどの石の上に1m前後の石を横に積み重ねている。長さは、先端部が崩壊しており形状や大きさについては不明であるが、現状で約2.4mを計る。

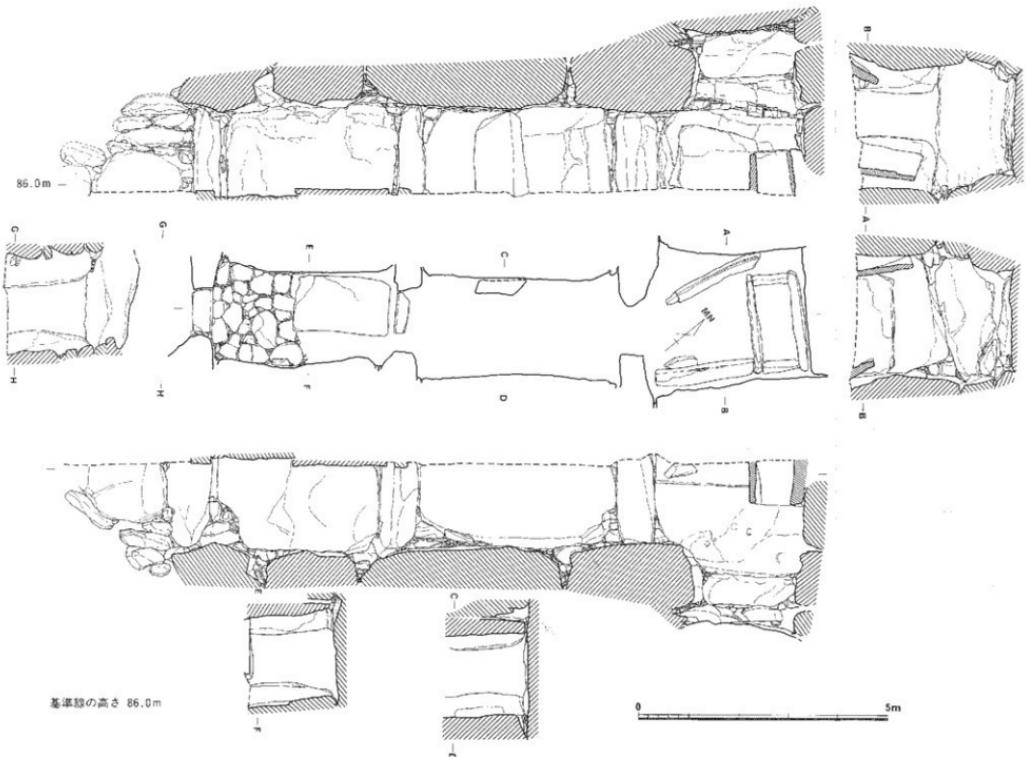
玄室は敷石まで達する盗掘を受け、その排土が入り口に向けて積まれた結果50cmほどの差ができるていた。このため盛土部分を掘下げて基線を通す作業を進めたところ、須恵器・鉄刀などが出土した。盗掘の際の取り残しと考えられたので位置を記録して取り上げ、さらに作業を進めた。その後須恵器・土師器・鉢器等が出土し、馬具の一部も検出した。この段階では遺物の出土状況の写真撮影のみで、本来の目的としていた石室の実測と墳丘の測量作業を進めることにした。石室の実測がほぼ終了し、遺物の取り上げにかかったが、さらにその下部にも遺物があり、馬具の部分が散乱している状況が認められた。また、金銅製の青葉や玉頭・土器・鉄器等が混じっているため、短期間での記録と取り上げは不可能であると判断し、一旦作業を中断して埋め戻した。

作業続行の予算措置・出土遺物の保存等について協議した結果、勝本町教育委員会が調査を続行することとなった。先に埋め戻した上を除き、遺物の検出作業と記録を続け、敷石の面まで確認を行って調査を終了した。

以上の遺物については、馬具の部分がかなり散乱していること、金環やガラス玉等がその間に混じっていることなどの点から、築造時の副葬品と考えられ、追葬の際にこの場所に移されたとも考えられる。
(町田)



第19図 笹塚古墳 墳丘復原図 (南西方向から)



第20図 番家古墳 石室実測図 (1/80)

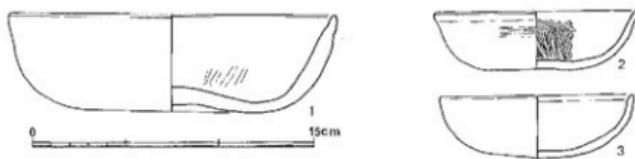
出土遺物

1) 土 器

・土師器 (第21図1～3 図版19)

3点が出土しているが、いずれも環である。1は大形のもので、直径17.6cm、高さ5.3cm以上であるが、底部が十数片に割れて盛り上がっている。体部は厚く9mmほどあり、わずかに内湾して伸びる口縁部はやや薄くなり、先端部分は丸くおさめている。内面にはヘラ様のものでのミガキ痕があり、内面の胴体下部にわずかに暗文の残っている部分が認められる。外面もヘラ様のもので磨いて仕上げている。丹が塗られて、内外面ともに淡い赤褐色を呈している。胎土に石英などの小砂粒が含まれているが、焼成はよい。2は小形の環で、直径11.0cm、高さ3.2cmを計る。十数片からほぼ完形に復原できた。外方に伸びた口縁部はやや薄く、先端部分は丸くおさめている。外面はヘラ様のもので、大層丁寧に横方向へ磨いている。口縁部の内面とその下部はやや磨減しているが、その直下には横方向に長く斜めに、その下には縦方向に長く斜めに、細い暗文が残っている。それぞれの暗文は非常に緻密に施されており、識別できる下方の暗文は、全周で約170本ある。この部分の全周の長さを単純に割ると、平均1.7mmに1本の割合で施文していることになる。また、底部の内面中央付近には螺旋状の暗文が、ほんのかすかに認められる。胎土には砂紋がわずかに認められるが、全体に精良で緻密な質のものを使用している。焼成はよく、内外面ともに赤褐色を呈する。作りや施文の仕方から、中央から搬入されたものの可能性が強い。3はほとんど完形で出土した。直径10.4cm、高さ3.4cmを計る。内湾しつつ上方に伸びた口縁部の先端をわずかに尖らせ気味におさめている。2よりやや丸みの強い作りである。内外面とも無数のヒビがはいり、内面底部付近では剥落しつつある。内外面ともヘラ様のもので磨いて仕上げられたものと思われ、外面にはごく一部にその痕跡が認められる。内面に暗文が施されていたか、判断できない状況である。丹が塗られていたものと思われ、外面は淡い茶褐色、内面は淡い赤褐色を呈している。胎土は精良で、焼成もよい。1ともども、搬入された可能性が考えられる。

これらの土師器の年代は、6世紀の後半から7世紀の初頭の時期と考えられる。



第21図 篠塚古墳出土 土器実測図(1)

・須恵器 (第22図1~11 図版19 第23図1~3 図版20)

須恵器には各時代のものや款種の器形がある。

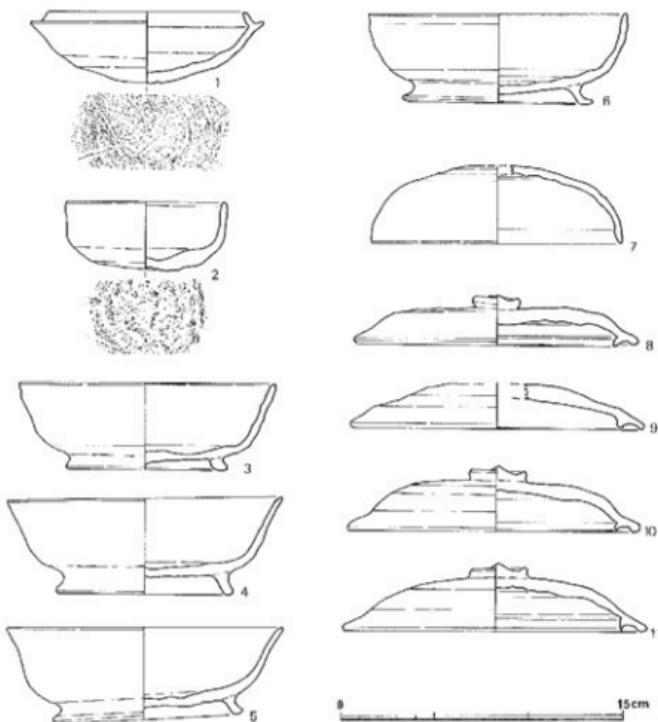
壺身 (第22図1~6 図版19)

1は約半分ほどが残っていた。直径12.4cm、口縁径10.4cm、器高3.8cmに復原できた。丸みをもった体部に、内傾しながら伸びるかえり、短く小さな受部が付く。体部は半分以上をヘラで削り、N字形のヘラ記号を付けている。内面底部はナデて仕上げているが、やや薄手で、丁寧に作られたという感じを受ける。外面は灰色、内面は淡い灰色を呈している。胎土は良質のもので、焼成も良好である。2は、直径8.6cm、高さ3.7cmの大きさの完形品である。外面底部は切り離したままに近い状態で、ここにX字形のヘラ記号を入れている。体部はわずかに外傾しながらほぼ直立しており、先端部は丸くおさめている。内面の底部にナデの痕跡がわずかに認められる。内面は茶色がかった灰色、外面は灰色で1/3ほどに黄褐色の自然釉のかかった部分がある。胎土に小砂粒を含むが、焼成はよい。3も完形品で、直径13.7cm、高さ4.7cmの大きさである。外方に張った形の高台は、直径8.7cmある。割と薄い作りで、内外面とも濃い灰色を呈している。胎土に小さな砂粒が目立つが、焼成はよい。4 わずかに外反しつつ聞く体部と、外方に張る形の高台をもつ。口縁先端部分はまるくおさめ、外方に若干傾いている。直径14.7cm、高さ5.3cm、高台の直径9.4cmの完形品である。内面底部はナデて仕上げ、貼り付けた高台のまわりはヨコナデで仕上げている。全体的に淡い灰色を呈し、灰色の縞模様が混じっている。胎土は良質であるが、焼成はややあく瓦質に似た焼き上がりとなっている。5も完形で、4とほとんど同じ作りである。4に較べ器壁がやや薄い。内面底部はナデて仕上げ、外面底部はヘラ様のもので部分的にナデ、簡単に仕上げている。高台の先端部分はやや外方に張っている。全体的に淡い灰色で、灰色の縞模様が混じる。胎土はよいが、焼成があく、瓦質に近い。若干形にひずみがある。直径14.7cm、高台の直径10.1cm、高さは5.1cmあり、4よりわずかに大きい。6もほとんど完形で、全体的にあざき色をしている。内湾しつつ伸びて直立に近い口縁部をもつ。割と薄い高台は、先端付近から外方に折れて張り出しているが、部分的にいびつな場所もある。直径13.8cm、高さ4.9cm、高台の直径10.1cmを計る。内面はナデ、高台の貼り付け部はヨコナデで仕上げている。胎土に小砂粒や石英粒が目立つが、焼成はよい。

壺蓋 (第22図7~11 図版19)

7は全体の1/4ほどの破片からの復原である。全体的に黒灰色を呈し、薄手の丁寧な作りを感じさせる。天井部の半分ほどを削っていて、内面はナデて仕上げている。丸い体部に、先端部を丸くおさめた口縁部が付いている。直径13.4cm、高さ4.1cmほどに復原できる。胎土、焼成とともに良好で、固く焼き上がっている。8 内外面ともに濃い灰色で、良好に聞く焼成されている。厚めの平らな形で、形の小さなつまみが付く。口縁先端部分は丸みをもち、かえりもやや厚い。内面天井部はナデて仕上げている。胎土に石英粒などの小砂粒が認められる。完形で、直径15.1cm、高さ2.7cm、つまみの直径は2.6cmある。9は全体の約1/4からの復原である。外面

は灰色、内面は灰褐色を呈している。薄めの口縁先端部分で、断面が三角形に近いかえりをもつ。内面の天井部はナデて仕上げられている。胎土に石英粒などの小砂粒を含むが、焼成はよい。直径15.6cm、体部の天井部分までの高さは2.4cmほどである。10はつまみ付きの蓋で、直径15.7cm、高さ3.5cm、つまみの直径3.1cmの完形品である。胎土の粘土は種類の違うものが混じっていたものと思われ、濃淡の灰色の縞模様となっている。天井部を削ったあと、つまみを貼り付けているが、その接合部分にヒビがはいっている。口縁先端部は丸くおさめ、内側に小さくて先端を鋭く尖らせたかえりが付いている。内面の天井部はナデて仕上げている。4の環身と対になるものと思われる。11は10とほとんど同じ作りで、胎土や焼成の状況ともよく似ている。ただ、縞模様がわずかに少ないと、大きさが若干異なる。直径16.1cm、高さ3.6cm、つまみの直径3.1cmと、10よりわずかに大きい。5の环身と対になるものと思われる。



第22図 笹塚古墳出土 土器実測図(2)

平瓶（第23図1・2 図版20）

2点が出土している。1は丸みの強い胴体に、口頸部を接合させている。体部は直径15.7cm、高さは10.4cmあり、最大胴径は体部のはば中央付近にある。口頸部の体部への接合部分にはヒビが残る。直線的に伸びる口頸部は若干厚く、先端部分は丸くおさめている。内外面に右回りのロクロを使用した水引きの痕跡が残っている。口縁先端部での直径は8.8cmあり、水平に近く作っている。器高は16.0cmで、胴径に近い。全体的に黒灰色を呈し火面にあたると思われる部分は灰色で、黄灰色の自然釉が残った状況も認められる。胎土は通有のものと思われるが、焼成はよくて固く仕上がっている。2は大きく割れた2片からの復原である。胴体上部の大部分と口頸部、底部の多くが残っていて復原できた。1にくらべ平らな胴体で、胴径15.7cmに対して胴体の高さは約8cmと半分ほどしかない。全体の高さは13.3cmを計る。胴体内面の中央付近には、焼成時に胎土がはじけたような痕跡がある。外面底部はヘラで削って調整し、ヘラ記号のようなものが付けられている。天井部を作るために、胴体の上部を直径約3.5cmほどの大きさに絞り、薄い粘土板を貼り付けている。この貼り付けた粘土板と天井部を切り取り、ここに口頸部を継いでいる。この接合部分はヒビとなって、その痕跡を残している。接合部での内側の直径は2.6cmを計る。口頸部は長さ5.5cm内外で、口縁先端部分の直径は7.0cmある。ほぼ真っすぐに伸びた口縁先端部分は丸くおさめ、その下方約1cmのところに浅い沈線を一条巡らせてている。内面は濃い灰色、外面は灰色で一部に濃い部分や黒灰色の部分もある。胎土には石英粒などの小砂粒がやや多い。焼成はよい。

長頸壺（第23図3 図版20）

口縁部をわずかに欠いただけで、ほぼ完形で出土した。最大胴径16.2cm、高さ21.1cmの大きさで、やや胴の張る形となっている。胴体の最も張る場所は、全体の高さの半分よりやや下にあり、低くて広い高台とあわせて安定した感じを与えている。肩の張った体部に、小さいが直径10.5cmとやや広めの高台を、外方に張り出す形で貼り付けている。口頸部は、体部に近い最も細いところで直径4.1cmを計り、体部の1/4の大きさとなっている。口縁先端部は薄く、ラッパ状に開き、先端部分を外方に折る形におさめている。口縁部の直径は10.6cmある。口頸部の下半分に、内外面とも右回りのロクロでの水引き痕が明瞭に残っている。全体に濃灰色で、灰褐色を呈する部分や備前焼の火擣を思わせる赤褐色の部分も認められる。胎土に5mmくらいまでの小砂粒や石英粒を含んでいる。焼成は良好で、一部に黄灰色の自然釉がかかり固く焼けている。

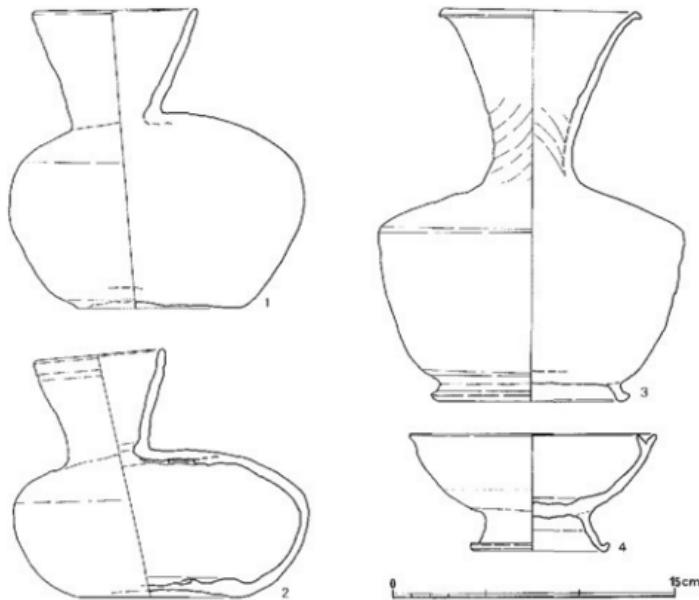
陶質土器（第23図4 図版20）

壺部は1/3ほどから、脚部は2/3ほどからの復原で、実物の壺部はやや傾いている。全体から受ける印象として、軽快で華奢、丁寧な作りを感じさせる。丸みをもった体部は内湾しつつ伸び、先端に内傾したかえりと外反する受部を付けるが、いずれも先端部分はわりと覗く小さな丸みを付けておさめている。体部の底を半分ほどヘラ様のもので削り、薄くて短い脚を貼り付

け、ロクロで調整を加えている。やや開いた形の脚先端部分は外上方に折り曲げ、先端部分を尖らせ気味におさめている。透かし穴はない。成形、削りともにロクロは逆時計回りに動かした痕跡が認められる。口縁部の直径13.1cm、坏部の高さ4.2cmで、脚部は高さ約2cm、脚端部の直径は7.4cmを計る。色調は全体に灰色を呈しているが、透明な自然釉のため光沢のある場所や、あざき色に変化している部分も認められる。精良な胎土を使用しており、焼成も良好で固く緻密に焼き上げられている。朝鮮半島の南部、洛東江流域から舶載されたものと推測される。

以上に述べた土器の様相が、本古墳の築造年代と使用期間を完全に示しているとは考えられないが、築造の年代と使用された期間についてはある程度推測できる。

今回出土した坏の身や蓋のうち、最も古いものは7世紀初頭、あるいは古くとも6世紀終末の時期で、新しいものは7世紀後半ないし終末期ころまでの時期が考えられる。このことから本古墳は、少なくとも6世紀終末までに築造され、7世紀の終わりころまでは使用されたと考えて大過ないものと推測される。ただ、今回の調査は、古墳の築造年代などを知るための発掘



第23図 筆塚古墳出土 土器実測図 (3)

調査ではなかったため、石室の2割に満たない面積しか床面を確認していない。従って、他の部分からの出土品によっては築造から使用の終末まで、時代の幅がもう少し広がる可能性は当然考えられる。

本古墳からは、朝鮮半島から舶載されたと考えられる馬具や陶質土器が出土した。また畿内で作られたと思われる土師器も出土している。直接的には、半島の土器や中央の土師器が壱岐と結び付き、また、半島から畿内にもたらされた豪華な馬具が、今度は畿内の中央の権力の象徴として壱岐に入り込んだもののように推測される。そして、この当時の日本と半島の間の、和戦備ただしい時代背景を見るとき、壱岐の在地勢力に対する中央のヤマト政権の政治的な攻略という、大まかな筋書きが窺えるようである。畿内から朝鮮半島にいたる通路に、点々とこのような中央との結び付きを示すような遺物の出土する古墳が知られている。国家的な祭祀が行われたとされる玄界灘の沖ノ島は別として、現在までは官地獄古墳が西の端に位置していた。宗像地方の豪族と中央政権が、固く結ばれていた証であるといわれている。今回、それに勝るとも劣らない遺物が笠塚古墳から出土し、畿内から朝鮮半島までが繋がったとの感を受ける。

一時代以前の、5世紀末と考えられている大塚山古墳は、弥生時代以来続いた原の辻遺跡を見渡す山頂に築かれている。生前の生活の基盤に繋がる場所であり、生活の地盤に縛られた在地系の豪族が葬られているものと推測されている。これに比べ、双六古墳や笠塚古墳の被葬者は、直接的には自らの生産の基盤に結びつく場所とは関係のないところに葬られている、と推測しておきたい。東に瀬戸の入江があつて深く入り込んでいる状況で、西にも湯本湾が控えている、東西の港の中間的な場所であるこの同分地区が壱岐での政治的・軍事的中心であったと考えられる。そして、この地区に壮大な墳丘を盛り、巨石を使った石室に葬られた被葬者は、一地方の単なる在地豪族とは明らかに違っているように思われる。中央の権力につながり、壱岐島内での絶対的な権力を保証され、その証として豪華な品々を贈られ、当時の朝鮮半島との交渉などにも関係するような豪族の姿が推測される。

なお、本古墳から出土した遺物で、金属器など図示していないが、以下のものがある。

鉄器としては、鉄刀・鉄鎌・鉄斧・刀子等があり、馬具では鞍金具（鏡板・引手等）、鞍金具（鏡・鞍橋・絞金具等）のほか杏葉・辻金具・雲珠などである。装身具として、ガラス小玉や金環などがある。そのほかスプーン状の副製品も出土している。

これらの遺物のうち、金属器については平成2年度から国庫補助を得て、順次、保存処理を実施しており、現在も続行している状況である。

(藤田)

・双六古墳

双六古墳は壱岐郡勝木町立石東触字双六に所在する。この一帯は壱岐に於ける古墳の一大密集地帯であり、著名な古墳が多く散在する。特に、本古墳の北東1kmには県指定史跡で、県下で最大規模の円墳である「鬼の窟古墳」が知られ、また北側600mには金銅製の馬具を副葬した「笠塚古墳」などが知られている。

双六古墳は、壱岐の中心部に位置する交通の要所である「亀石」から南東へ400m、標高100m程の緩やかな丘陵上に築造された前方後円墳である。古墳は墳丘東側が一部崩壊している外は比較的旧状を保っている。現状は、東側が畠地として利用され、南側には竹林が繁茂する。



第24図 双六古墳周辺地形図（上 笠塚古墳、下 双六古墳）(1/5,000)

双六古墳の名は、幕末に編纂された「⁽¹⁸⁾老岐名勝図誌」の中に見える。その文を引用すると『双六塚 二塚の坤にあり。住吉界なり。坤向

立石村私記云、双六鬼屋大塚つ、人口より奥まで長五間三尺とあれとも、今量みるに入六間半、奥の間高一丈三尺、横八尺五寸あり。⁽²⁾とあり、すでに石室は開口してあつたことがわかる。その法量を現在値に換算すると、石室長が11.7m、玄室の高さが3.9m、幅2.55mということになり、今回の計測値とほぼ一致するようである。

古墳そのものについてはこれまで未調査であるが、松永泰彦による墳丘と石室の略測が報告⁽³⁾されている。それによると長さ77m、後円部の高さが5mの前方後円墳となっている。

今回の県教育委員会による測量は、墳丘部については50cmの等高線で測り、石室は20分の1で記録することとした。なお、等高線の基準点は、偶然にも古墳後円部頂上に記されてあつた勝本町基本計画図中111.9mを使用することとした。

墳丘（第25図）

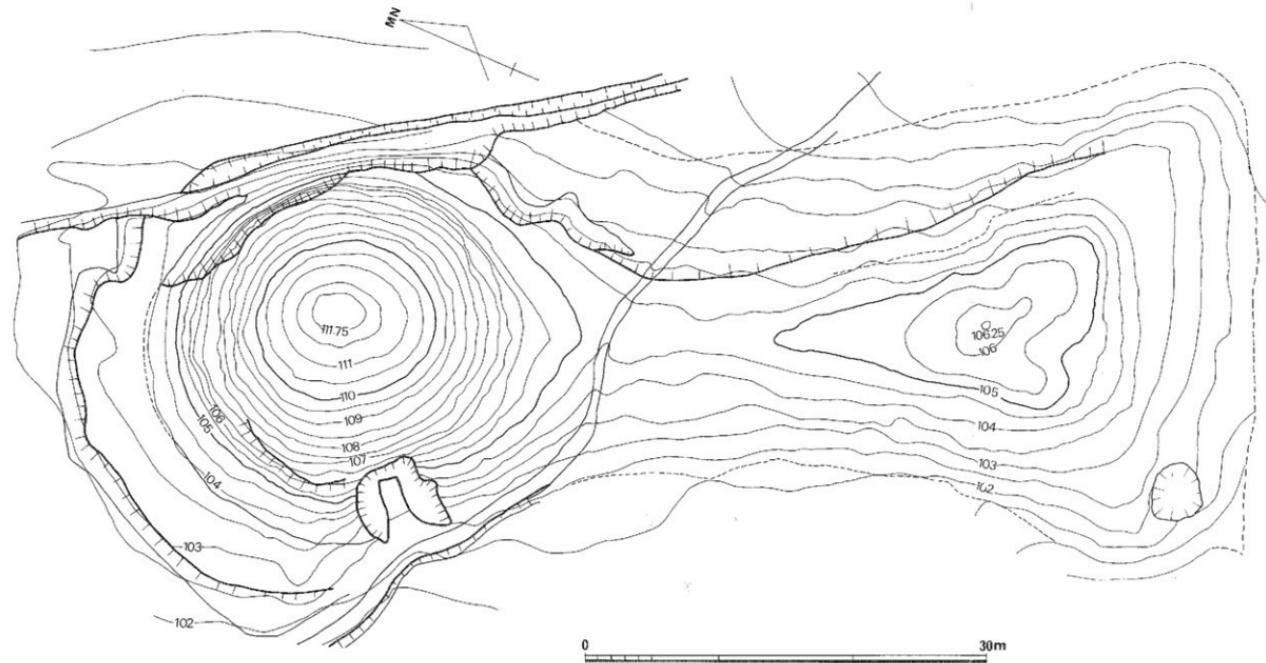
古墳は主軸をN-25°Wに置く前方後円墳である。その構造にあたっては、まず基壇とも言うべき盛土を北側で約1m位、南側で約3m位の高さに築き、その上に墳丘を築く二段構成の方法をとっている。目につく墳丘の長さは75mであるが、基壇部分まで含めると全長89.5mを測る。また後円部の直徑は30mであるが基壇を含めると39mになる。後円部の高さは基底部の標高102mから測ると9.75mである。前方部は西側先端部分が明瞭でないが、長さは約44m、幅は約30mであるが、基壇部分まで含めるとそれぞれ50mと38m程になるものと思われる。前方部の高さは、基壇底部から測ると、4mを少し越えるが基壇上では2m程度となる。基壇が後円部側に比して高く築かれているのは、後円部との差を少なくするための配慮の可能性がある。

くびれ部も明瞭とは言えないが、幅14m高さ2.5m程度である。なお、後円部直径と前方部の長さの比率は基壇部分を含めない数値だと1:1.46になり、後円部直径と前方部幅の比率はやはり基壇部分数値を除外すると1:1になるものと推定される。また、古墳全体の形状は後円部が高く、前方部が低く長いタイプということになろう。

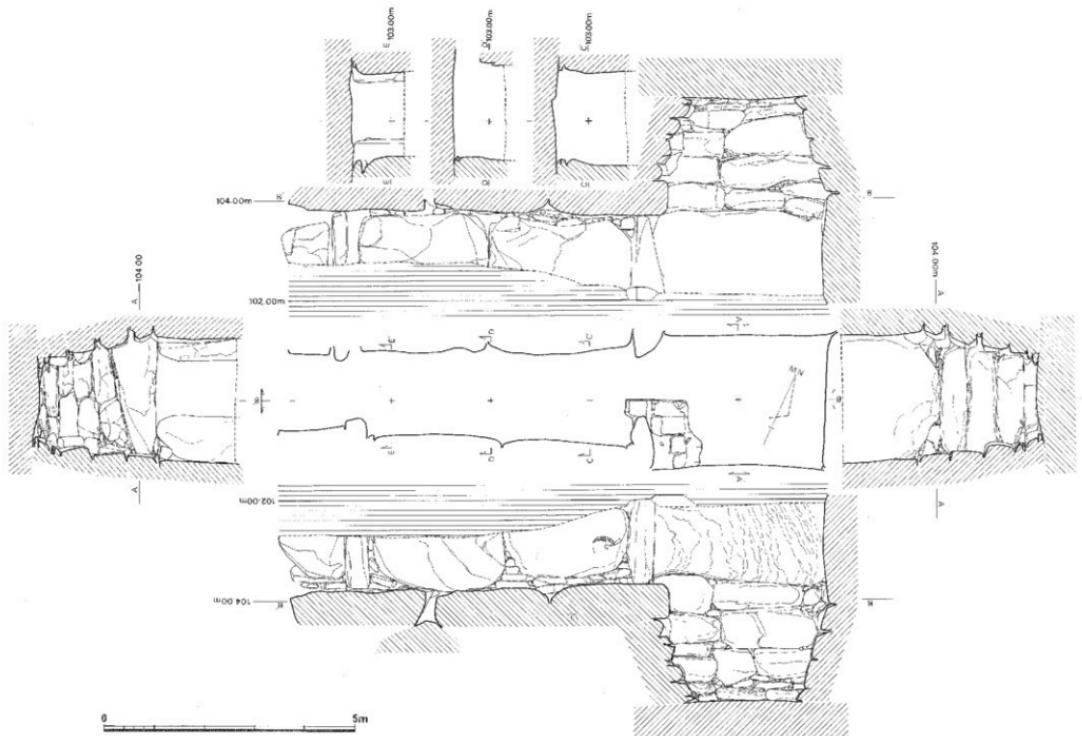
石室（第26図）

石室は横穴式で後円部西側に在り、南西に向かって開口している。江戸時代には既に開口していたことは前述したが、第二次大戦中には防空壕としても利用されていたといふ。

石室は玄室、前室そして羨道からなる。玄室は長さ3.3m、幅2.6mで長方形のプランを持つ。高さは4.2mである。現在、床には厚さ20cm程の土が堆積しているが、一部確認したところでは床面には扁平な割石を敷きつめている模様である。玄室の構築にあたっては、まず奥壁並びに南北壁にそれぞれ1個の円石を腰石として据え、その上に比較的大きめの横長の石を4段にわたって持ち送り状に積み上げる。天井は1枚の巨石で覆う。南側側壁には表面調整のためのノミ痕が認められる。なお、玄室内には石棺などは見当たらない。また、玄室入り口には高さ1.8m、厚さ50cm程の袖石がほぼ並行しておかれている。



第25区 双六古墓 墓丘实测图



第26図 双六古墳 石室実測図 (1/80)

前室は南側側壁部で長さ5.3m、北側で5.6mを測る。幅は1.7mである。高さは石室内に土砂が堆積しているため正確には不明であるが、玄室内の床面を参考にすると1.8m程度になろう。側壁にはそれぞれ2個の巨石を据えて腰石とし、その間隙を数十個の横長の割石で充填する。天井は3個の円石で覆う。南壁玄室寄りの腰石には50cm×30cm程の大きさの船の線刻が彫られているが、その中には松浦家の家紋である三ツ星の旗印と「肥前松浦郡…」の落書が認められる。恐らく江戸時代の所産であろうと考えられる。前室入り口には厚さ40cmほどの袖石を2個配しているが、配置が平行でなく若干ずれが生じている。

羨道は現存値で長さ1.4m、高さ1.2mであるが、堆積土を除くと高さは1.8m程になるものと思われる。やや小振りで丸みを持つ一枚石を両側壁に据えている。閉塞石は見当たらない。

なお、石室構築には大小問わず全て玄武岩を使用している。玄武岩は壱岐島内で最も多く産する石であり、かなり大きい塊石でも容易に見ることができる。

古墳の発造された時期については、出土遺物がこれまで全く知られていないため、正確には不明であるが、古墳の形状や石室の特長から、6世紀末から7世紀前葉の時期が推定されている。

(高野)

註1 後藤正恒・古野尚盛『壱岐名勝図誌』文久元年(1861)名著出版 昭和45年

2 松永泰彦「壱岐島北部における古墳の現状」『壱岐第15号』壱岐史跡顕彰会 1981

・対馬塚古墳

対馬塚古墳は、壱岐郡勝木町立石東触字稗坂にある。壱岐の島の西海岸、湯本湾に面する標高100mほどの丘陵上に位置している。島内で古墳群の多い布氣地区の南西にあたり、双六古墳の西南西1.1kmほどの場所である。松本友雄氏の『壱岐考古録』第1編に対馬塚古墳の説明に統けて「この塚の北方二町余にして一墳あり、これ亦発掘されしものにあらず横川古墳なり」との記載がある。直径十数メートルの円墳で、墳丘の北側が一部削られ、石材の露出している場所が認められる。横穴式石室と思われるが、開口していない。対馬塚古墳から南東1kmに満たないところには、弥生時代の遺跡で、壱岐島内では原の辻遺跡とならび大規模な遺跡として知られるカラカミ遺跡がある。

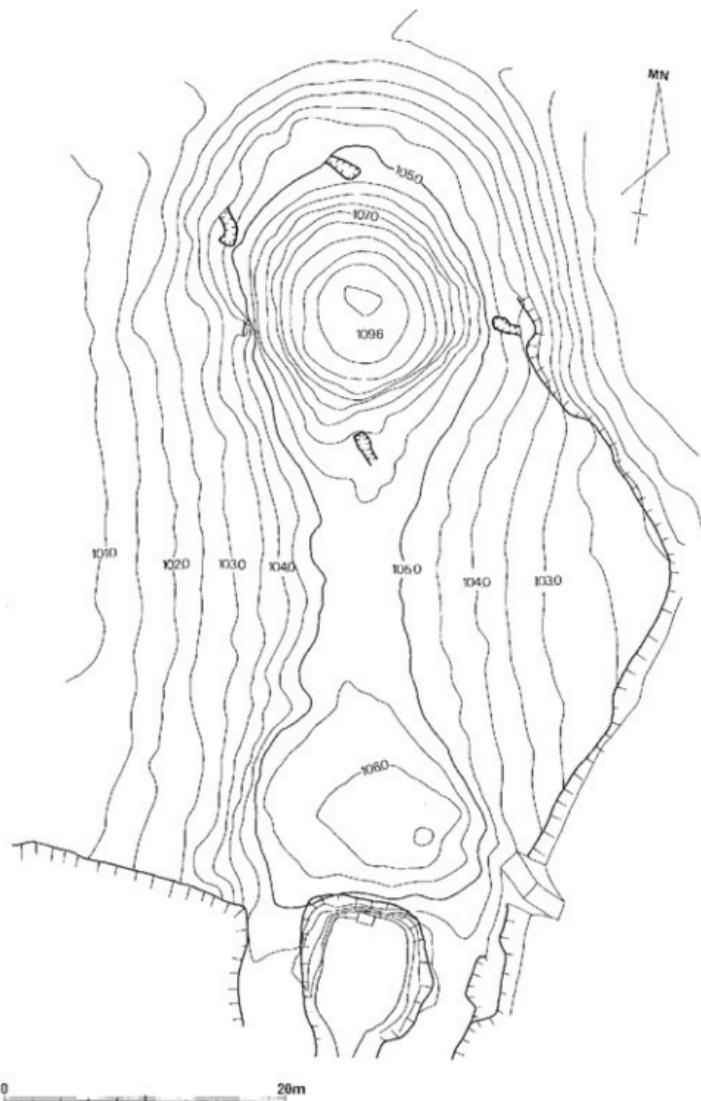
本古墳の頂上からは、天候の条件の良い日など、北西の海上に対馬が見渡せる。

古墳の現状は山林で、シイの木を中心多くのが茂っている。後円部の北側と東側が、一段に築かれたような形で残っている。第二次世界大戦の末期に、周囲に較べこの場所が高いため、高射砲を据え付けるとのことで頂上が削平され、その際に墳丘に段が付けられたとのことである。また、この段付近には四方に向いて埴輪が掘られている。後円部の頂上は、直径7mほどが平坦にされており、中央部からやや西側に標高109.6mの四等三角点が設置されている。

江戸時代前半に記録された『壱岐経風土記』に、「対馬塚古墳」の名があり、そのなかに10年ほど前までは人の出入りがあった、との記録があり、当時すでに開口していたことがわかる。



第27図 対馬塚周辺地形図（中央のアミ目 対馬塚・上方のアミ目 横川古墳）(1/5,000)



第28図 対馬塚古墳 墓丘実測図 (1/400)

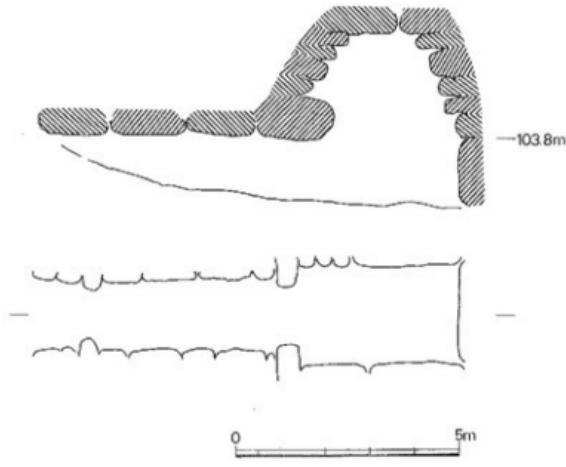
また、10年ほど前までは、とあることから、『夷岐續風上記』として記録されたころには、人の出入りができない状況であったことが窺える。

昭和のはじめころ、本古墳に隣接して居住していた松本友雄氏が石室に入ったとのことである。同氏とともに石室に入ったという女性が近所におられ、今回の調査中にいろいろと当時のことをお聞かせくださいました。その方の話では横穴式石室で一番奥に石棺があった、とのことである。その後、勝木町在住の松永泰彦氏らによって島内北部を中心に古墳の状況が調査され、本古墳についても『夷岐第15号』に報告されている。

墳丘（第28図）

墳丘は、主軸を北から7°西に振って、ほぼ南北に向いている。後円部の北側は、墳丘裾の部分でいったん平坦になり、そのあと徐々に北側に高くなっているが、東側は急な傾斜が続き谷まで落ち込んだ状態となっている。くびれ部は明瞭な形ではなく、墳丘の裾部についても明確ではない。くびれ部からゆっくりと広がり、徐々に高くなって前方部を形成している。前方部の南裾の部分は、東西6m、南北8mほどの大きさに掘り下げて平坦にされ、南側に向いて幅1mに満たない小道が掘られて続いている。この平坦な場所に今宮神社がまつられており、現在石の祠があるが、近辺の人々には牛神さまとして知られている。江戸時代はじめのころに、今宮神社の鉢座の記録があることから、ここが掘り下げられたのはそのころのことと考えられる。

古墳の規模については、以下のとおりである。全長は65mほどと推測される。後円部北側は墳丘の裾部が比較的わかりやすいが、前方部については先端部分が掘り下げられていて、臼状



第29図 対馬塚古墳 石室略図

が明確でないためである。後円部の直径は30m前後と推測され、前方部の幅は25mほどと思われる。後円部の墳丘の高さは7mから8mほどと推測される。現在の前方部の最高所で標高106.5mあり、109.6mの後円部との高さの差は3.1mとなる。

石室（第29図）

石室は、今回の調査中にわずかに開口していることを知り、麻植土をかき分け身を伏せてどうにか入ることができた。北から東に約80°振れ、ほぼ西に向いて開口する両袖式の横穴式石室で、玄室と前室の2室がある。今回の調査は、墳丘の測量を目的としたもので、石室を実測する時間的な余裕もなく、以下、正確な測量の結果ではないが、簡単に紹介しておきたい。長方形の玄室は、長さ約3.6m、幅約2.4m、高さ約3.8mである。1m以上の腰石を据え、その上に十段以上に小形の石を持ち送って積み上げ、全体をドーム状に構築している。天井部はかなり狭く、2枚の天井石を載せている。石棺ではなく、床面に石棺材の一部と思われる加工のある厚い板石が数点残されている。玄室・前室とも敷石の有無については不明である。玄室部分は両袖式になっていて、厚さ0.4mほどの石を立てている。この部分の幅は約1.1mある。前室は、長さ約3.9m、幅約1.5mで、細長い形である。この部分の側壁は小形の石を数段積み上げて築いている。羨道部は長さ1.1mが残っている。玄門から羨道までは4個の天井石を、高さを揃えて使用している。前室から羨道までの天井石の高さをそろえるという点では、篠塚古墳、双六古墳と同じような作り方である。石室全体の長さは現在9.4mで、江戸時代の記録では奥まで8間（約14.4m）とあり、それに較べると5mほど短くなっている。羨道部の天井の高さは標高103.8mほどである。この高さから推測すると、石室の床面の高さは標高102m前後になるものと思われる。

対馬塚古墳は他の古墳群とはやや離れた場所にあり、湯本湾に近い。復原した墳丘の形は、前方部がかなり長い双六古墳と近い感じの形をしており、急に盛り上がる後円部も似ている。石室は小形の石を多く使用し、強い持ち送りの技法で、ドーム状に丁寧に構築している。巨石による石室をもつ篠塚古墳や双六古墳より、若干古い築造を感じさせる。老岐島内での前方後円墳としては、時代的に古式の部類のものではないかと推測される。

湯本湾方面に生活の多くをおいた豪族と、中央の権力が結ばれた結果として、ここに対馬塚古墳が築かれた、と推測することも可能であろう。このことについては、後述する。（藤田）

参考文献

『老岐續風土記』

『老岐名勝圖誌』

松本友雄『老岐考古録』

松永泰彦『老岐島北部における古墳の現状』『老岐第15号』老岐史蹟顕彰会 1981年

本報告書『篠塚古墳』

・根上山古墳第1号墳（第30図1）

根上山古墳は、壱岐島における古墳の集合地ともいべき、布氣・百合畑・国分地区の南東方向にあたる。近辺には、古墳はあまり知られていないが、本古墳の東側に根上山古墳第2号墳があり、その東に草山古墳群として3基が知られているに過ぎない。南東方向、1.4kmほどの場所に大塚山古墳がある。この古墳は、小形の板石を積み上げて構築した、いわゆる堅穴系横口式石室をもち、南西に開口する。石室の構造や出土した須恵器から5世紀後半の古墳と考えられ、壱岐で最も古い古墳のひとつである。深江田原の北側の山に築かれた、根上山古墳や大塚山古墳の被葬者は、眼前の深江田原を生活の場としていたことが考えられ、布氣・百合畑・国分地区の古墳の被葬者とは系統を異にするものと思われる。

また、根上山古墳から南南西2.5kmの場所に大原天神の森1号墳・2号墳（第30図2・3）がある。これらの古墳も、深江田原の西部を生活の場とする、やはり在地系の豪族のもので、布氣・百合畑・国分地区の古墳とは系統が違うものと考えられている。（藤田）



第30図 根上山古墳・大原天神の森古墳群の位置と周辺地形図（1/25,000）

位置と現状

観上山古墳第1号墳は、壱岐郡芦辺町湯岳本村触明細田河に所在する。本古墳は、壱岐島の北東部に位置し、北から東にかけて玄界灘に面し、西は勝木町、南は石田町・郷ノ浦町に接する芦辺町の東南部に当たり、約400ha（現状）の耕地面積を有する深江田原の水田地帯を見下ろす。標高約83mの丘陵上に立地し、本古墳の約90m東側丘陵上には前方後円墳と言われている^{註1)}観上山古墳第2号墳がある。また、本古墳の東南方向へ約1.4kmには、大塚山古墳（円墳）、俵山古墳（同）が本古墳と同様に深江田原を見下ろす地点に築かれている。

本古墳は、墳丘上から西側一帯は松林で、北側は旧道路敷を残し、大部分は現在の道路建設の際に5m程掘削されている。また、東側および南側は、丘陵部分を残し2m程掘削され畠地として利用され、西側のみ旧地形を残しているようである。

墳丘（第32図）

墳丘は、ほぼ南北に横たわる前方後円墳である。主軸はN-13°-Eの方向に向いている。墳丘の東側部分（前方部から後円部にかけて）の墳丘裾部で掘削のためか、急角度で傾斜し、また前方部の南端部分を一部を残し、墳丘上から裾部にかけ掘削を受けている。草石はないようである。

墳丘の規模は、全長推計29m程である。後円部の直径は、12m程で、高さ3.5mを計る。

前方部は、長さ15m程、幅14m、高さ3.5mを計る。くびれ部分の幅は、8m程と推測され、高さは、0.5~2m程を計る。前方部と後円部の比高差は2m程である。

主体部は、昭和62年度の県内遺跡分布調査の際には石室部分の露出は見られなかったが、今回の調査時において、石室内部の一部と覆道部分の封土が掘削を受け露出した状



第31図 観上山古墳第1号墳周辺地形図 (1/5,000)

態が確認されたので、今後早急な保護対策を取る必要があろう。

石室は、南西方向に開口した横穴式石室をもつものと考えられる。内部構造は、比較的小さな石材をドーム状に積み上げて構築されている状態が窺えるが、規模等については現状からは計測が不可能であった。また、天井石も1枚（長さ1.2m幅不明）露出し、羨道部分に一部が見えるが詳細は不明である。遺物の出土については、確認されていない。

構築時期については、堅穴系横穴石室を有する大塚山古墳が遺物等により5世紀後半に比定されているが、本古墳は主体部の構造からして後続する古墳と考えられよう。（副島）

註1 『大塚山古墳』 芦辺町文化財調査報告書 第2集 芦辺町教育委員会 1987

『カジヤバ古墳』 芦辺町文化財調査報告書 第3集 芦辺町教育委員会 1988



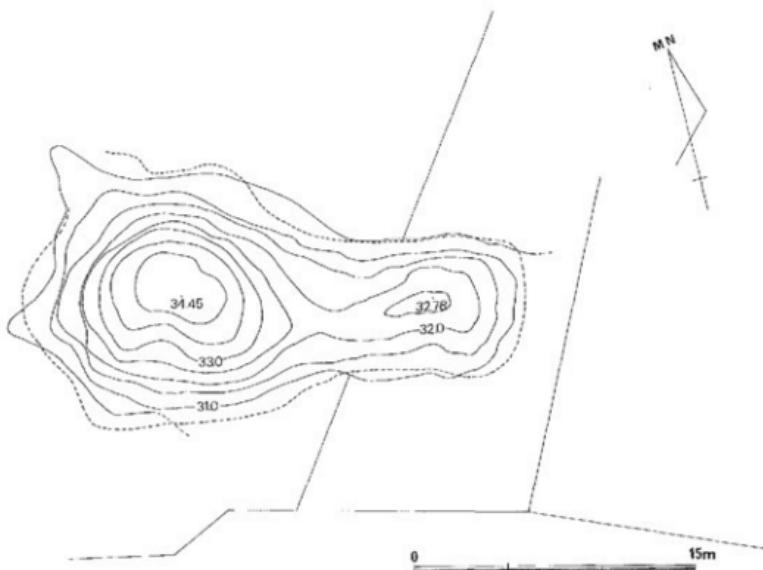
第32図 親上山古墳 第1号墳 墳丘実測図 (1/300)

・大原天神の森古墳群

大原天神の森古墳群は壱岐郡郷ノ浦町大原触にある。大原触は郷ノ浦町の北東部にあたり、北は壱岐島中央を東西に流れる幡鉾川をはさんで石田町湯岳射子触に接し、南は郷ノ浦町平人触の丘陵に、東西約500m、南北約200mの小さな沖積地を隔てて接している。大原天神の森古墳群は大原触を東西に走る町道大迎線の南側にあり、大原触・平人触の丘陵を隔てる沖積地を見下ろす標高30mの位置にあるが、大きくは幡鉾川が溝す沖積平野「深江田原」の西奥にあるといえる。

深江田原は現在広大な水田地帯になっているが、『魏誌』倭人伝の壱岐島に関する記述の一節に「やや田地あり…」と書かれた水田地帯にあたることが確かであり、古來壱岐島の穀倉地帯であった。弥生時代の原の辻遺跡や、大原山古墳などの古い古墳が沖積平野周辺にあることがこのことを物語っている。

一方、大原触以西の幡鉾川流域に広い沖積平野はないが、壱岐島西岸の半城湾から深江田原西奥まで2km弱の平坦な地形になっており、このあたりが壱岐島を横断する交通路であったことが考えられる。『壱岐神社誌』の大手長男神社の項には、このあたりまで幡鉾川を海水が週上した伝説が記され、コース上に弥生時代の柳田遺跡や山中遺跡、興触古墳や河原神社古墳群が



第33図 大原天神の森 1号墳 墓丘実測図 (1/300)

あることは、このことを裏書きすることかもしれない。

大原天神の森古墳群は深江田原西奥の沖積地を生産の場とし、壱岐島横断路の要衝を占めていた豪族の墳墓であったと考えられる。

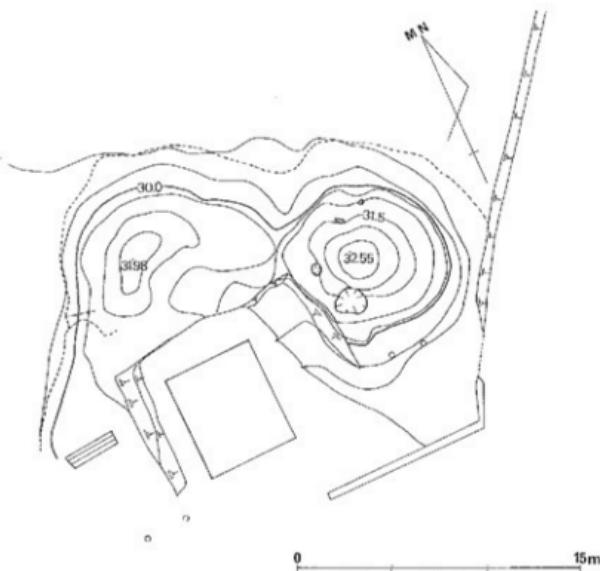
大原天神の森古墳群は町道大迎線の南側にある2基の小形の前方後円墳で構成されている。

・1号墳

大原天神（正しくは大原主神社）社殿の西30m、町道の南側25mにあり周辺は5筆からなる私有地になっている。古墳自体は裸木に覆われ、周辺はヒノキが植林されている。

小形の前方後円墳で、主軸は磁北から76°西に振れ、前方部はほぼ東に向いている。保存状態はよい。全長27mである。後円部は直徑14m、裾部の標高30.5m、墳頂部は高さ34.45m（裾部からの高さ約4m）でやや平坦になっている。くびれ部は幅7mで、標高31m強（裾部からの高さ1.5m強）である。前方部は長さ13m、幅7.5mで標高32.58m（裾部からの高さ2m強）である。後円部の直徑と前方部の長さの比率は7:6になっている。葺石・周濠などは認められない。

墳丘測量のみの調査で、石室に関しては不明であり、遺物も採集していない。



第34図 大原天神の森 2号墳 墳丘実測図 (1/300)

・2号墳

大國玉神社の社殿北側、ヒノキの植林のあるなだらかな丘陵にあり、社殿改修の工事で後円部の南西部部分から前方部にかけてかなり影響を受けている。特に、前方部は社殿用地の土が盛り上げられて台状が分かりにくくなっているが、小形の前方後円墳であることは確実である。

主軸は磁北から65°西に振れ前方部を北西方向に向け、1号墳と約30mの距離をおいてほぼ前方部が向かいあう状態になっている。全長は約24m程度と推定される。後円部は現状南北13m強、東西12m強で、墳頂の標高は32.57mで墳裾からの高さは約3.5m強である。くびれ部は社殿などの工事にかなり影響されて、幅は分かりにくいが6m程度が推定される。裾からの高さは1.5mで、標高30.5mである。前方部は長さ12m程度と推定されるが、社殿の土がかなり盛り上げられていて正確ではなく、幅も推定しにくい。仮に1号墳と同じ程度と仮定すれば、後円部直径と前方部の長さの比率は1:1程度になる。葺石・周濠などはない。

後円部の南側標高31~32mの部分に盗掘坑があり、内部主体の一部と見られる石材があり、南側標高29m台には石材の一部が露出しているが、内部主体の構造などは明らかでない。なお、大國玉神社社殿北側の土層に版築の跡が観察される。

2号墳も1号墳と同じく墳丘測量のみであり、表面採集の遺物もなく古墳の構築時期なども確定しがたい。

(正林)

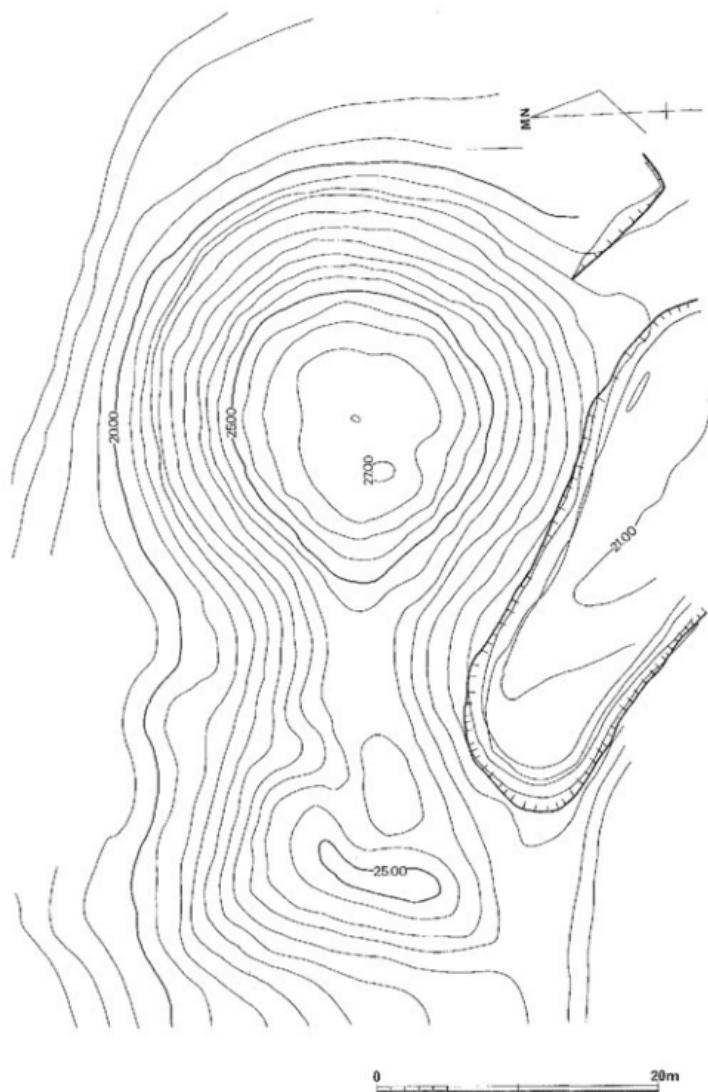
3) 北松浦郡

北松浦郡での調査では、田平町の岳崎古墳の墳丘測量を行った。この岳崎古墳は、北松浦半島の先端部近くにあり（第35図1），同町の笠松天神社古墳（第35図2）と並び九州本土部で最も西方に位置する前方後円墳である。笠松天神社古墳は、里田原遺跡という弥生時代からの生産の場とした平地の、すぐ南方の丘陵の上に築かれている。眼下の平地で実力を培ってきたと思われる豪族が、中央の政権と結ばれたことの表れと推測される。一方、岳崎古墳は壱岐水道に臨んだ低平な台地上に位置していて、古墳の周辺には、農業生産の基盤となるような平坦地がない。このような状況から端的にいうならば、対馬の根曾古墳群の前方後円墳と同様の、西日本あるいは畿内と朝鮮半島を結ぶ海上交易など、海を生活の舞台としていた人物の墳墓と考えることもできよう。笠松天神社古墳は在地系の豪族の古墳と考えられるが、岳崎古墳はその出自あるいは系統を異にするもの可能性が考えられる。

（藤田）



第35図 岳崎古墳の位置と周辺の地形図 (1/25,000)



第36図 岳崎古墳 墳丘実測図 (1/400)

・岳崎古墳

岳崎古墳は、北松浦郡田平町岳崎免に所在する。本古墳は、北松浦半島の西北端に当る田平町の北端に位置し、玄界灘に開口した釜田湾に面し、平戸蘆戸から壱岐・対馬へ至る海上交通路を望む標高20m程の丘陵上に立地する。また、本古墳から南へ約2kmの地点に前方後円墳の笠松天神社古墳^(注1)が知られている。

本古墳は、昭和55年に再発見されるまで、古墳が在ることは田平町郷土誌に記載されていたが、場所、形状、規模および所在も不明で確認出来ていなかったものである。現状は雑木と竹林に覆われ、墳丘の前方部の一部分が最近海岸へ下る通路として、掘削を受けている以外はほぼ原形の姿を留めているようである。

墳丘は、主軸がN-96°-Eの方向で、ほぼ東西に横たわる前方後円墳である。墳丘の北側は、海岸へ急激に傾斜し、南側は丘陵部分を掘削した痕跡が窺われ、この土を利用して築いたものと考えられる。後円部の東南側の墳丘裾部に接して、幅6m×長さ10m程の道路状構造が見られ、その先は幅1m程の小径となり、海岸へ下る通路となっている。この構造は、墳丘上のはほぼ全面に拳大から人頭大位の礫石を利用した葺石で覆われていることから、この葺石に使用する石材を運び上げる時に使用したものと推測される。

墳丘の規模は、全長56m程である。後円部の直径は33m程で、高さ6.5mを計る。前方部は、長さ25m、幅25m程と等しく、高さ2~4.5m程である。くびれ部分の幅は、15mで高さ1.5~3mを計る。前方部と後円部の比高差は、2m程である。

石室は、未開口であるので規模、内部構造等については不明である。

築造時期については、遺物の出土もなく、また埋葬施設が確認されていない現状において、詳細には不明である。

(副島)

註1 藤田和裕ほか『笠松天神社古墳』—北松浦郡田平町所在の前方後円墳— 田平町文化財調査報告書 第4集 田平町教育委員会 1989

4) 南高来郡

南高来郡では、島原半島唯一の前方後円墳といわれている吾妻町の守山大塚古墳の埴丘測量を行った。古墳のある場所は島原半島の北部で、沖積平地の少ない半島南部に比べ、平地にやや恵まれているためか遺跡も多い。特に高峯式の古墳は、ほとんどが半島の北部にある。しかし、沖積平地はよほど大事な生産の場として使われていたものと思われ、多くの古墳は雲仙岳北麓の高地にある。そういう点では、守山大塚古墳が田内川沿いの平地にあることに若干の戸惑いを受ける。ただ、この田内川に沿った平地には数箇所の高まりがあり、これら自然の丘陵を整形して古墳を造ったと考えれば納得が行かないことでもない。今回の調査中に、後円部の墓地脇で二重口縁の壺の破片が採集された。この土師器は古墳時代前期のものと考えられ、これが本古墳の建造と関係するなら、本古墳は古墳時代前期に造られたものと推測される。

守山大塚古墳の北側、有明海を挟んだ対岸にも数個の古墳が知られている。高来町の善神さん古墳は、線刻の絵があることで知られている。小長井町の大峰古墳は、横穴式石室をもつ古墳で、奥壁の床から天井石までの2/3ほどの部分に、一枚の大形の板石で棚状の施設が設けられている。これらの古墳の作り方は、筑後川流域の影響なども考えられている。(藤田)



第37図 守山大塚古墳の位置と周辺地形図 (1/25,000)

・守山大塚古墳

地理的位置

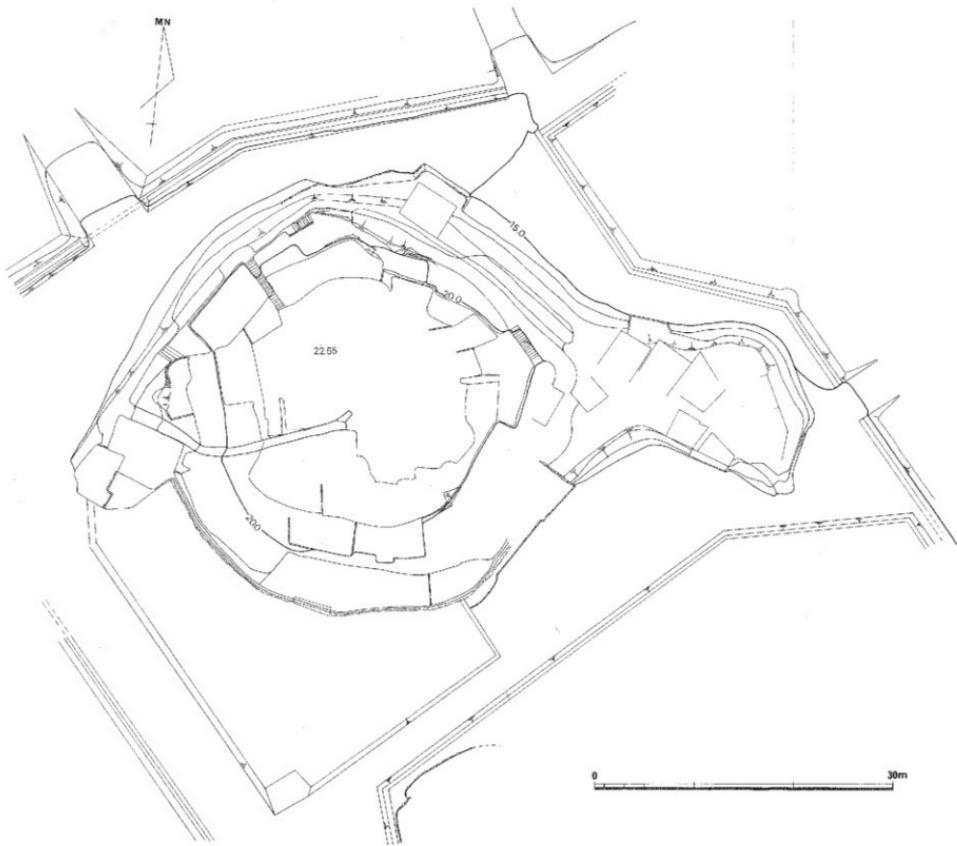
本古墳は、南高来郡吾妻町木村名字大塚に所在する。位置的には、町内東側端の有明海に流れ下る田内川の海岸線から600mほど南東へあがった標高15mほどの扇状地に、小高い丘のように独立した墳丘がある。現在、墳丘は共同墓地として使用されており、墳頂部から裾部にかけて石塔で覆いつぶされている。また、この一帯は扇状地を利用して水田地帯として営まれており、墳丘裾部周辺は土地拡張に伴って削り取られて急傾斜をなしていて、この斜面をブロックによって固められている。

調査経過

過去の調査としては、昭和27年頃に後円部から箱式石棺が1基出土したと言われているが、詳細については不明である。その後昭和41年8月に、本古墳に接した南側の陪冢といわれている丸塚古墳について、島原史学会が長さ5m、幅1.5mのトレンチを設置し、試掘調査を実施し



第38図 守山大塚古墳 周辺地形図 (1/5,000)



第39図 守山大塚古墳 墳丘実測図 (1/400)

ている。その結果、埋葬に関連した遺構の検出は認められなかったが、深さ40~50cmで犬歯状の鉄具2点と、弥生時代の高环片と土器器の高环片（丹塗研磨）が出土した。守山大塚古墳及び丸塚古墳に関しては、昭和52年、島原工業高等学校校舎上部によって墳丘測量実測を実施している。当時の実測によれば、前方後円墳の全長が83m、後円部直径45m、後円部の高さ7m、前方部の高さ2.7m、丸塚古墳は直径約27m、高さが3mであったと記載されている。これによつて、本古墳の大きさの概略が認識され、文化財への理解を深められた。しかし、島原工業高等学校が行った実測では、古墳に関する専門的認識及び目的が不備なため、正確な記録とまでは至っていないのが実情であったと思われ、今回測量図及び計測数値の修正を行つた。

調査と成果（第39図）

調査は、1/200の縮尺で1mの等高線を記入することとし、平成2年11月20日から実施した。墳丘測量にあたって基準杭を後円部墳頂から順次設定することとし、これと平行して標高の移動作業を始めた。墳丘そのものが墓地化しているため、石塔及びコンクリートブロック塀に阻まれ見透かしのきかない測量調査となつた。

調査の結果、最近まで島原半島で唯一の前方後円墳として周知されていたものの、その規模については東彼杵郡のひさご塚古墳と比較されながら、実情は不明確であった。今回の調査では、現存する全長は66mあり、後円部の直径45m、高さが7.2mであった。また、前方部の幅は15mで、高さは2.5mを計り主軸の方位はN-86°-Eを示している。なお、周溝や埴輪の存在については、確認できなかつた。
（町田）

参考文献

- 『大塚古墳測量平面図』「杉山古墳調査報告書」—消失した古墳の図上復原の研究—
吾妻町の文化財3 吾妻町教育委員会（古田正隆） 1978
- 『吾妻町の古墳文化』「吾妻町史」吾妻町（古田正隆） 1983
- 『柿ノ木古墳』「長崎県文化財調査集報Ⅰ」長崎県文化財調査報告書第35集
長崎県教育委員会 1978
- 『妙法塚遺跡』「長崎県文化財調査集報Ⅱ」長崎県文化財調査報告書第45集
長崎県教育委員会 1979
- 『長戸古墳・丸尾古墳』「長崎県文化財調査集報V」長崎県文化財調査報告書第57集
長崎県教育委員会 1982
- 『松尾遺跡』「長崎県文化財調査集報XI」長崎県文化財調査報告書第91集
長崎県教育委員会 1988

第3章 まとめ

1) 長崎県の古墳

3年度にわたって実施した前方後円墳の測量図と、現在までに報告されている前方後円墳の図を第40図に示している。いずれも1/1,000の縮尺で統一している。図に示したのは、対馬3古墳、壱岐7古墳、本土部の4古墳の計14古墳で、長崎県内の前方後円墳の半分強である。

長崎県内での前方後円墳としては、対馬に4箇所が知られ、壱岐の13箇所とあわせて、中央政権と朝鮮半島を結ぶ、大きな交通路であったことを表している。この大きな交通路から西にそれ、北松浦半島の先端近く達したものもある。在地系の勢力によって築かれたと考えられる笠松天神社古墳であり、海上交易によって力を養ってきたと思われる岳崎古墳がそれである。

一方、中央政権の支配権が佐賀平野から西に向かった状況も考えられる。そのひとつは、佐賀平野の西端に達したあと、大村湾東岸にいたっている。東彼杵町のひさご塚古墳などがそれであろう。佐賀平野から南に、あるいは海上から、前方後円墳の制度が南高来郡にも達している。吾妻町の守山大塚古墳がそれであろう。

墳丘の規模についてみると、双六古墳が全長89.5mで、長崎県では最長の前方後円墳ということになる。守山大塚古墳の現在の長さは66mであるが、前方部の削平のため往時の規模については不明といわざるを得ない。しかし、後円部の直径は45mあり、これに見合の前方部を付けた場合、90m前後の大きさが考えられる。第1表に示したように、30mから80mまでの大きさのものが10基あり、10m級のものと20m級のものも10基で、小形の前方後円墳が多いのが明瞭であろう。50m級以上のものは、県内にはわずか5基にしか過ぎない。そのうち2基は壱岐にあり、鬼の窟（矢橋）古墳や猿塚古墳などの常々たる古墳も知られている。5世紀後半まで、大規模な古墳の出現は壱岐では知られておらず、爆発的に古墳が増えたのは、6世紀のなかばから『日本書紀』に急増する朝鮮半島関係の記事も、その背景のひとつと考えられる。

以下、6世紀から7世紀ころまでの状況についてみておきたい。

2) 6世紀から7世紀における日本と朝鮮半島の状況

6世紀から7世紀における日本と朝鮮半島の関係について、『日本書紀』についてはかなりの記述が認められる。半島南部での日本の利権や、新羅の進出にかなりの神経を使っている状況が窺える。垂仁天皇21年、近江毛野臣が率いる6万の兵を組み、筑紫国造磐井が反乱を起こした。磐井は九州北部にあって、密かに新羅と結んだことであるが、反乱を計画して年が経っていたとのことで、一応中央の政権の支配下に位置づけられているとはいえ、何らかの不満を抱いていたものであろう。

6世紀末から7世紀初頭においても新羅に対しての対立が日立ち、方を越える軍隊を派遣した記事がたびたび残されている。7世紀初頭、『日本書紀』推古10年条によれば、求目皇子が



第40図 長崎県内の前方後円墳 (1/1,000)

第1表 長崎県の前方後円墳・調査古墳一覧表

番号	名 称	所 在 地	全長 (m)	前 部 (m)		後円部(m)		くびれ部		後円部 の向き	調査年	標 位 (m)	備 考	
				長さ	幅	高さ	直徑	高さ	幅					
1	双六古墳	壱岐郡勝本町立石東触	89.5	50	38	4	39	9.7	14	2.5	西北西	平成2	102	横穴式石室 基坑上に壠造 細長い前方部
2	宇山大塚古墳	南高木郡吾妻町本村名人塚	66	以上	15	2.5	45	7.2			西	平成2	15	前方部かなり削平 現在墓地として使用
3	ひきご塚古墳	東彼杵郡東彼杵町波津崎浦	58.8	21.1	18.5	2.6	37.7	6.3	11		西北西	平成2	2.2	前方部かなり削平 芝石
4	対馬塚古墳	壱岐郡勝本町立石東触	65	35	25	3.5	30	7		2	北	平成3	103	横穴式石室 鋸長い前方部
5	齿塚古墳	北松浦郡川平町齿崎免	56	24	25	2	32	6			東	平成3	21	
6	出早原古墳	下芦郡美津島町大字通知	40	21	4	1.2	19	3.7			西北東	昭和3	53	前方後方墳 横穴式石室
7	亂上山古墳第1号墳	壱岐郡芦辺町本村触	29	15	14	3.5	12	3.5	8		西北東	昭和2	85	横穴式石室
8	笠松天神社古墳	北松浦郡田平町小手田免	34	以上	14	1.4	22	2.5	9.6		北西	昭和63	34	横穴式石室か端式石棺 芝石
9	根曾古墳群2号墳	下原郡美津島町大字通知	36	17	9	1.5	19	3.5			東	昭和23	20	
10	百合畠古墳群第1号墳	壱岐郡勝本町百合畠触	26.5	以上		1.6	20	4.7			西北西	平成2	108	北側1/3ほど削平
11	根曾古墳群1号墳	下原郡美津島町大字通知	30	12.3	5.5	1	14.5	5	5		西南東	昭和23	30	
12	大原天神の森1号墳	壱岐郡都ノ浦町志原大原触	27	13	7.5	2	14	4	7	1.5	西	平成元	31	
13	大原天神の森2号墳	壱岐郡都ノ浦町志原大原触	24	12			13	3.5	6	1.5	東南北	平成元	30	
14	百合畠古墳群第20号墳	壱岐郡勝本町百合畠触	20	7.5	6		13.6	3.3	5.5	東	平成2	107	後円部 鋸削平	
15	根曾古墳群4号墳	下原郡美津島町大字通知	20									昭和23	10	
16	百合畠古墳群第3号墳	壱岐郡勝本町百合畠触	18					3			東		110	
17	百合畠古墳群第14号墳	壱岐郡勝本町百合畠触	20					2			東北東		96	横穴式石室
18	百合畠古墳群第15号墳	壱岐郡勝本町百合畠触	21					2			北東		96	横穴式石室 前方部にも横穴式石室
19	亂上山古墳第2号墳	壱岐郡芦辺町本村触	20	以上			3						80	
20	山ノ神古墳群1号墳	壱岐郡芦辺町区分本村触					10	4					100	横穴式石室
21	妙見寺古墳群2号墳	壱岐郡芦辺町中野御麻触	20					6.3			東		133	
22	石走古墳群1号墳	大村市石走大村触	30								西		10	横穴式石室
23	カサンガン古墳	東彼杵郡東彼杵町波津崎浦	25	12	19	1.5	15	2	11	1.5	南東	平成2	2	現在墓地として使用
24	琴平神社古墳	大村市武部郡大嵐寺	20	10			10	2			東		50	
25	勝木古墳	壱岐郡勝本町百合畠触		円墳			30	6.8				平成元		横穴式石室 6世紀末～7世紀前半
26	音源古墳	壱岐郡勝本町百合畠触		円墳			66	12.5				平成元		横穴式石室 6世紀末～7世紀前半

將軍となって出陣している。来日皇子は現在の福岡県志摩郡まで進み、「聚船船進軍糧」という段階に至りながら病に倒れ、翌年の春に筑紫で死亡している。このため兄の当摩皇子が征新羅將軍となり、難波から発船したとされている。

推古31年条にも数万の軍を渡海させ、征新羅軍を派遣している。そして、半島から完全に撤退するのは、663年に新羅と唐の連合軍に白村江において、壊滅的な打撃を受けて敗退した時点であろう。打撃がかなり大きかったであろうことは、翌664年の対馬・奄美・筑紫に防人と烽を置き、筑紫に大きな堤を築いて水を貯えた、ということからも窺える。北部九州から、大和にいたる交通の要衝に朝鮮式の山城を築いていることから、朝鮮半島からの軍隊の進入の可能性を想定し、それに対しての備えを目的としていることも明白である。

日本からの進入の目的については、日本が朝鮮半島の鉄資源について非常に強い関心をもっていたことを示す記事がある。^(註1) 大和政権は、また、金銀などの貴金属や綿、錦などのいわゆる財宝的なものについてはもちろん、人的資源ともいう各種の技術者を含めて、常に朝鮮半島からの補充を欲し、また実行していた状況が記述されている。

大和政権が朝鮮半島に進むルートとして、『日本書紀』にみられる地名としては、難波・大泊海・熱田津・穴門・郷大津・志摩・松浦・鶴浦など、大阪湾から播磨灘・燧灘・伊予灘・周防灘と、瀬戸内海を西に進んだ事が記されている。瀬戸内海を抜け、さらに西に進み郷大津に至る。来日皇子の征新羅軍の場合はここで船を集め、軍糧を運ぶ、とあり、九州北部一帯でのかなりの物資の調達が想像される。昔、乱をおこした磐井の恨むところの一因であったとも考えられる。志摩から松浦に至り、ここから奄美・対馬に渡り、朝鮮半島南部に上陸したものと推測される。白村江での大敗のあと、直ちに対馬・奄美・筑紫に防人を置き烽を設置したということや、順次に朝鮮式山城を築いていることは、このルートの存在を明白にしている。これらの通行路上に存在する地方豪族に対しては、一方では威圧があり、さらにもう一方では懐柔があって、硬軟両用、時に応じて対していたのであろうと想像されるが、筑紫の国造磐井についてはいかがであったろうか。『日本書紀』や『筑後風土記逸文』などには、天皇の命に従わず、強くて暴虐であると、とかく悪者にされているが、磐井にしてみれば、強大な権力によって服従を強いられ、そのあげく対朝鮮半島関係の悪化などによっては、人的・物的な提供を強要される状況に、我慢のできないところも多かったと考えられる。新羅と結び征新羅軍を阻み、中央政権に対して反乱をおこした事件のあと、磐井の息子葛子が糟屋の屯倉を献上して死罪を償なった、旨の記載が『日本書紀』に認められる。当時としては、一族の長老の大罪に対して一族ともどもの追求があったことが想像されるが、父の大罪に対して屯倉の献上ということで連坐を免れようとした、ということが記してあることの裏には、可能性としてそれが許される状況があったのではないかとも思われる。中央の政権にとって、磐井の乱に対しては、かなりの手痛い思いがあったことを示す一端ではないかと推測される。

中央政権側の威圧から、懐柔への方針の変化とも考えられ、このことは、玄界灘に面した宮

地獄古墳や、壱岐の笠塚古墳出土の遺物のあり方にも結びつくのではないかと推測される。すなわち、宮地獄古墳出土の金銅製の馬具や、笠塚古墳出土の同じく金銅製の馬具類・畿内から持ち込まれたと思われる土師器など、すべて中央からの下賜あるいは提供品であったと考えられるからである。熊本県の江田船山古墳からは、剣鏡や銀象嵌大刀・衝角付冑・短甲・剣・槍などの武具、轡・鎧などの馬具、金銅製冠帽・垂飾付冠帽・垂飾付耳飾・金銅製袴などの装身具、須恵器・土師器などが出土している。これら遺物には、百济や伽耶地方の大陸文化と北部九州の文化、大和の文化が混在しているとの指摘があり、「当時の日本の政治的支配関係、对外関係をとき明かすのに重要な位置にある」とされている。^(註2) 大和政権の勢力が南九州へ伸びるために必要な場所であり、熊襲と呼ばれた人たちへの前線基地として使用するため、そこを治めている豪族に朝鮮半島系の品物を贈って懷柔したものと考えられる。江田船山古墳の被葬者の受けていた扱いは、性格的には、宗像地方を治めた宮地獄古墳の被葬者や朝鮮半島への交通路、壱岐の笠塚古墳の被葬者と同様のものであったと推測される。

壱岐の古墳のうち、5世紀代のものとしては大塚山古墳が確認され、その近くの俵山古墳はまだ古かったと推測されている。このほかには5世紀代の古墳は知られていない。6世紀の後半に、島の中央部に大形の古墳が集中して築造される。矢櫃古墳・双六古墳・笠塚古墳・掛木古墳などであり、これらは壱岐の有力者の墳墓と考えられる。征新羅軍の司令官あるいは副官などの死亡について、壱岐に葬ったような記録はなく、やはりこれらの古墳は壱岐島の有力者の墳墓と考えるのが妥当であろう。しかし、壱岐の島のみの経済状況からみると、6世紀後半から7世紀前半のごく限られた期間に、これらの古墳を続けて造るのは、非常に困難ではなかっただと推測される。さらに古墳築造に動員される人間についても、一地方豪族とその血統の力のみで可能であったか、疑わしい点も残る。664年に、防人を置いたとされるが、6世紀においても対朝鮮半島関係はたびたび悪化した時もあり、そのような状況のもとで壱岐は兵站基地的に利用された可能性が考えられる。兵員や物資、また、それらを前線に送り出すための人員など、ある程度の集積がなされていた、と考えるのが普通ではなかろうか。以下、まったくの推測にしかすぎないが、平時におけるこのような人員を動員することにより、島内での経済に破綻をきたすことなく大きな古墳を造ることができたことの要因と考えておきたい。

中央政権側にしてみれば、古墳を築くことに人員を動員することで、壱岐の豪族の協力が得られれば失うものはさほどなく、得られるものが多いということは、今まで繰々と述べてきたことからも考えられることである。6世紀から7世紀にかけての壱岐と、それを取り巻く大和政権の対朝鮮半島政策について、推測を交えて述べてきた。要約すると次のようになろう。

- ・5世紀ころまでは、弥生時代以来の在地性の強い豪族が、それぞれの生産基盤に近い場所に古墳を築いていた。
- ・国家の後ろ盾を得た壱岐の豪族は、在地基盤より島の要衝で東西の港に近い国分地区周辺に移り、また、死後はそこに大きな古墳を残すことになった。

- ・朝鮮半島の技術者や鉄資源などを欲しがっている大和政権の、朝鮮半島への交通路に対馬とともに奄岐は位置していた。
- ・大和政権は、磐井の乱などを教訓に、海上交通を技とする宗像や、兵站基地としての奄岐の豪族に、半島系の豪華な馬具や畿内の土器などを贈って懐柔していた。
- ・奄岐はさほど大きな島ではないが、全長90mにちかい双六古墳、直径45mの矢櫃古墳、金銅製の豪華な馬具が削開された笹塚古墳などが築かれたのは、以上のような情勢に無関係とはとうてい考えられない。

以下、推測として、対朝鮮半島との関係悪化に備えて、大和政権側の人員の常駐があり、奄岐の豪族の古墳の築造にあたって、それら人員の動員が許された可能性もある。駐留者のなかには築港の技術のある者や、堤を築くなど土木関係の技術をもった人物の存在も想像される。

奄岐中央部の古墳のなかで、明らかに同一の手法で設計したと考えられる笹塚古墳や双六古墳などがあり、埴丘や石室の設計者についてもいろいろ興味が引かれるところである。

いろいろな手抜かりや、準備不足、力量の不足によって、完全に意を尽くしているとは思いませんが、奄岐島内の古墳に限らず、今後いろいろな問題について、その本質に迫るための資料の一端としても、本報告書が活用されれば甚だ幸いだと思っています。

今回の、3年にわたる調査に、快くご協力をいただいた各古墳の土地所有者の皆様方や、関係各町の教育委員会教育長様ならびに職員の方々に、篠くお礼を申しあげます。 (藤田)

註1 『魏志』「東夷伝 倭人条」

註2 『江田船山古墳』熊本県文化財調査報告書第83集 熊本県教育委員会 1986

註3 『大塚山古墳』芦辺町文化財調査報告書第2集 芦辺町教育委員会 1987

参考文献

- 『長崎県史跡名勝天然記念物調査報告1』長崎県調査委員会 1926
- 『対馬島誌』対馬教育会 1928
- 『我が長崎県の先史時代及び原史時代の遺跡及び遺物の概略について』長崎県農業 第26輯 津田繁二 1940
- 『考古学から観た対馬』『対馬の自然と文化』柄井和愛 1950
- 『平戸町大久保免峰久保古墳』『平戸学術調査報告』 京都大学平戸学術調査団 1951
- 『大島村の山浦河内免勝負田古墳』『平戸学術調査報告』 京都大学平戸学術調査団 1951
- 『対馬』東亜考古学会 水野清一外 1953
- 『長崎県上原郡ディショウゴウ古墳』『日本考古学年報3』三木文雄 1955
- 『大将軍山古墳出土品』『埋蔵文化財要覧2』 文化財保護委員会 1959
- 『長崎県遺跡地名表 理藏文化財包蔵地一覧』長崎県文化財調査報告書第1集 長崎県教育委員会 1962

- 『古墳時代—九州—』「日本の考古学 古墳時代 上」小田富士雄 河出書房 1966
- 『九州考古学39・40』「長崎県大村市・黄金山古墳調査報告」小田富士雄 1970
- 『てぼ神古墳調査報告』佐世保市文化科学館文化財報告2 佐世保市文化科学館 1971
- 『曲崎古墳群調査報告書』長崎市教育委員会 1977
- 『長崎県埋蔵文化財調査集報I』「小野古墳の調査」 長崎県教育委員会 1978
- 『杉山古墳調査報告書』吾妻町の文化財3 吾妻町教育委員会 1978
- 『柿ノ木古墳』瑞穂町文化財調査報告書第1集 瑞穂町教育委員会 1978
- 『美津島町誌』 美津島町 1978
- 『長崎県・黄金山古墳』「九州考古学研究古墳時代篇」学生社 小田富士雄 1979
- 『長崎県・高下古墳』「九州考古学研究古墳時代篇」学生社 小田富士雄 1979
- 『長崎県埋蔵文化財調査集報III』「ひさご塚古墳・鬼の穴古墳・野田古墳」
長崎県教育委員会 1980
- 『洲蔭遺跡』美津島町文化財調査報告書第2集 美津島町教育委員会 1980
- 『対馬の歴史探訪』 永留久恵 1981
- 『対馬・壱岐の古墳』「探訪日本の古墳 西日本編」有斐閣 横山巳賀子 1981
- 『壱岐第15号』「壱岐島北部における古墳の現状」壱岐史跡顕彰会 松永泰彦 1981
- 『対馬・壱岐の古墳文化』「東アジア世界における日本古代史講座2」 小田富士雄 1984
- 『仲ノ崎遺跡』小倆賀町文化財調査報告書第4集 小倆賀町教育委員会 1984
- 『コフノ採漁跡』「上対馬町文化財調査報告書第1集」 上対馬町教育委員会 1984
- 『古墳時代』「国見町郷上誌」 国見町 1984
- 『宮田古墳群』 外海町教育委員会 1985
- 『古田遺跡』「小佐々町文化財調査報告書第1集」 小佐々町教育委員会 1985
- 『町内遺跡分布調査・II』「小倆賀町文化財調査報告書第6集」 小倆賀町教育委員会 1986
- 『大塚山古墳』芦辺町文化財調査報告書第2集 芦辺町教育委員会 1987
- 『カジヤバ古墳』芦辺町文化財調査報告書第3集 芦辺町教育委員会 1988
- 『小崎古墳群』松浦市文化財調査報告書第4集 松浦市教育委員会 1988
- 『小佐古石棺墓群』「大村市文化財調査報告書第13集」 大村市教育委員会 1988
- 『笠松天神社古墳』田平町文化財調査報告書第4集 田平町教育委員会 1989
- 『野田古墳』「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書VI」
長崎県教育委員会 1989
- 『鬼の窟古墳』「芦辺町文化財調査報告書第4集」 芦辺町教育委員会 1990
- 『ひさご塚古墳』「東彼杵町文化財調査報告書第5集」 東彼杵町教育委員会 1991
- 『前島古墳群』「時津町埋蔵文化財調査報告書第1集」 時津町教育委員会 1991

図 版



前方部(北東より)



後方部(南東より)

出居塚古墳 墓丘

図版 2



石室（南より）

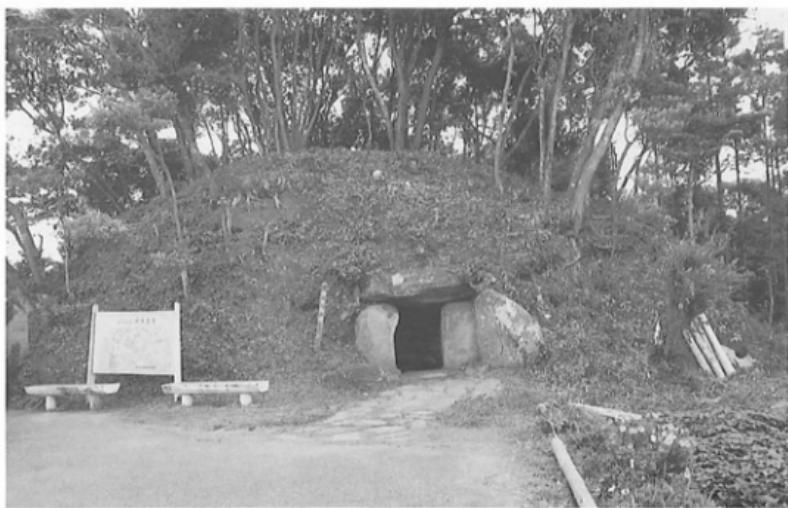


石室西侧壁

出居塚古墳 石室



古墳遠景



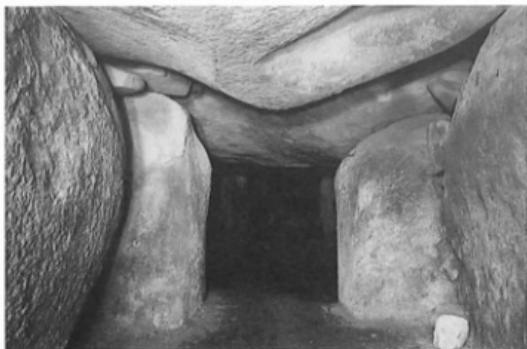
古墳近景

掛木古墳 墳丘

図版 4



玄室から入口を見る



中室から玄室を見る



入口の状況

掛木古墳 石室 (1)

図版 5



玄室の状況



石棺の状況

掛木古墳 石室 (2)

図版 6



天井部



東壁上部

西側側壁



東側側壁



掛木古墳 石室 (3)



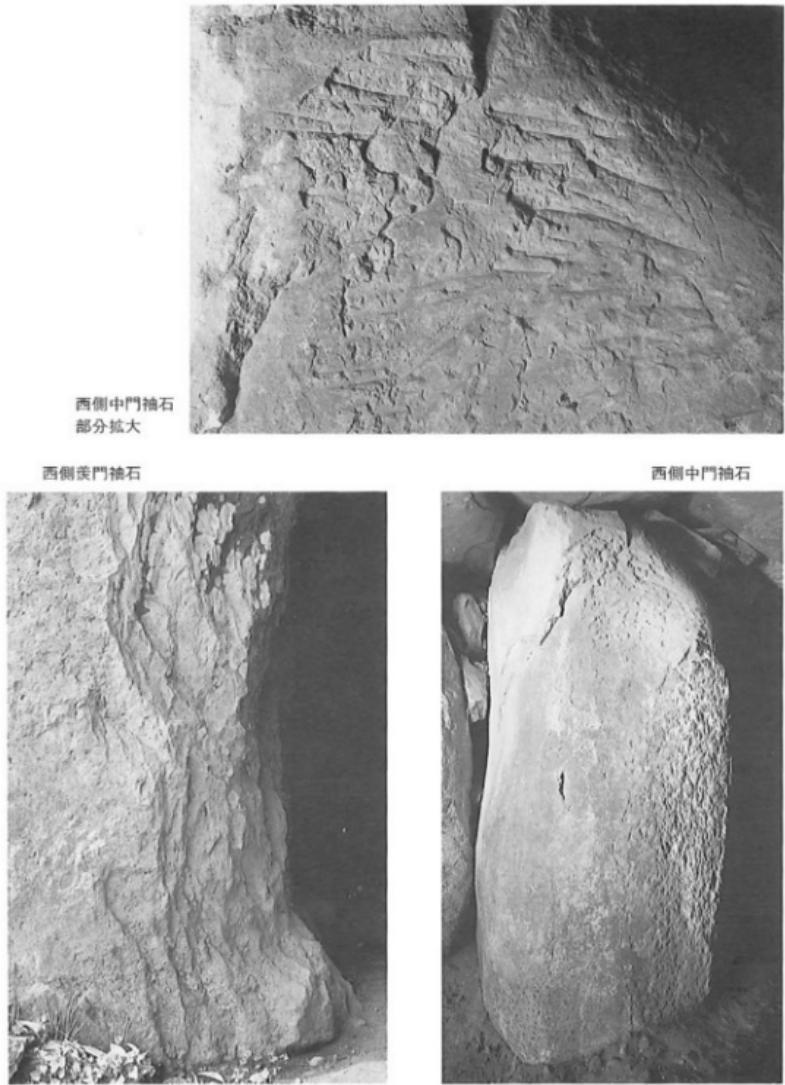
中室 須恵器・床面検出状況



後門框石検出状況

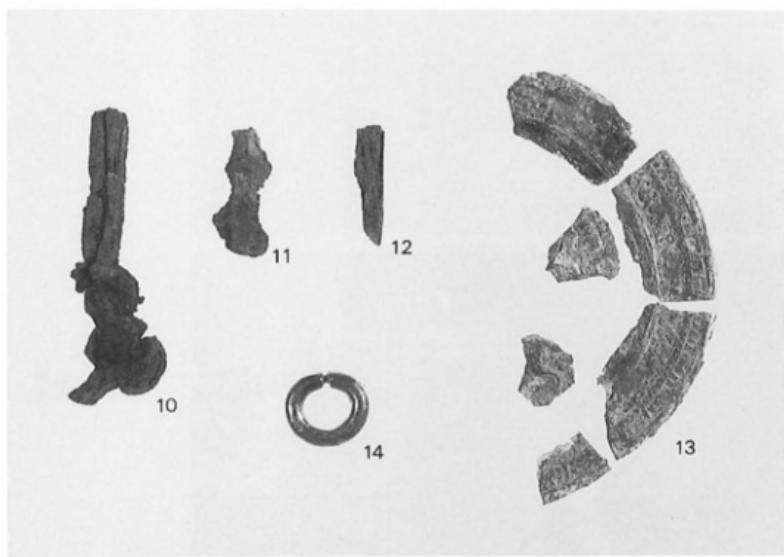
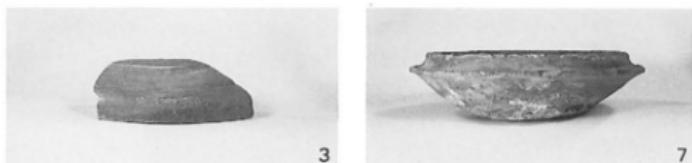
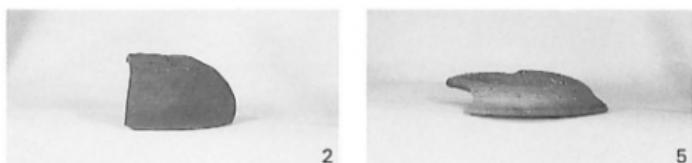
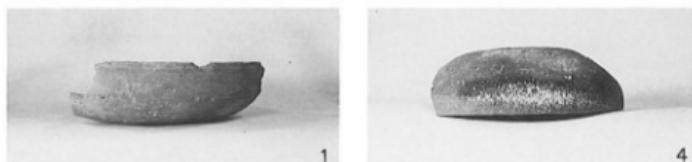
掛木古墳 石室 (4)

図版 8



調整加工の状況

掛木古墳 石室 (5)



掛木古墳 遺物 (1~5・7は1/3, 10~14は1/2)

図版10



墳丘(南から)



調査風景

百合畠古墳群 第1号墳 墳丘



百合烟古墳群 20号墳 墳丘（北東から）



百合烟古墳群 20号墳 墳丘と伐採風景
百合烟古墳群 第20号墳 墳丘

圖版12



百合畠古墳群 20号墳 墳丘 (南西側から)



百合畠古墳群 20号墳 調査風景

百合畠古墳群 第20号墳 墳丘



遠景（南西から）



墳丘（南西から）

笠塚古墳 遠景・墳丘

図版14



調査開始時の入口



墳丘



墳丘基壇の状況

笠塚古墳 墳丘



前室から玄室を見る



奥壁と石棺の状況

笠塚古墳 石室 (1)

図版16



中室から入口を見る
中央の石に神代文字
があったとされる



奥壁に沿って
置かれた石棺



前室の敷石の状況

笠塚古墳 石室 (2)



墳丘測量風景



石室実測風景



調査終了時の石室入口と墳丘

笠塚古墳 調査風景

図版18

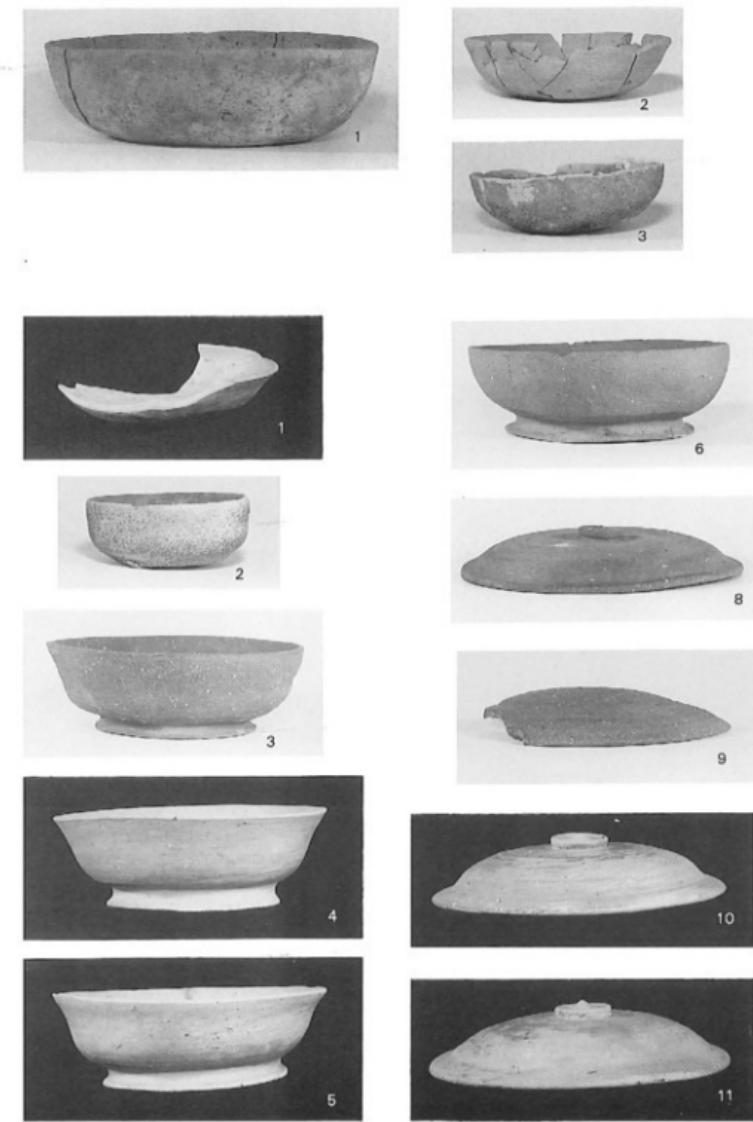


土器の出土状況



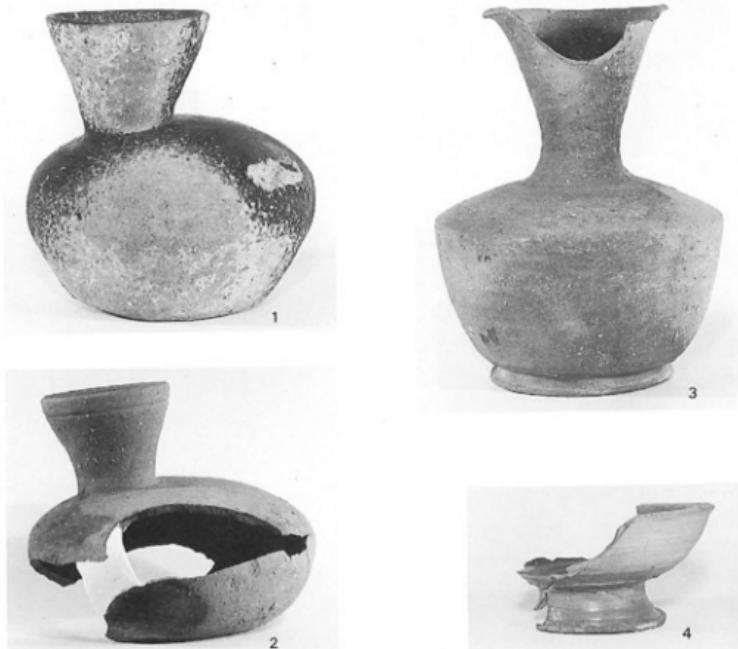
馬具などの出土状況

笠塚古墳 遺物出土状況



篠塚古墳出土 土師器・須恵器（約1/3）

図版20



笹塚古墳出土 須恵器・陶質土器（約1/3）



笹塚古墳出土 金属器（約1/3）



笛塚古墳出土 金属器 (馬具・鉄鎌 約1/2)

図版22



墳丘（東から）

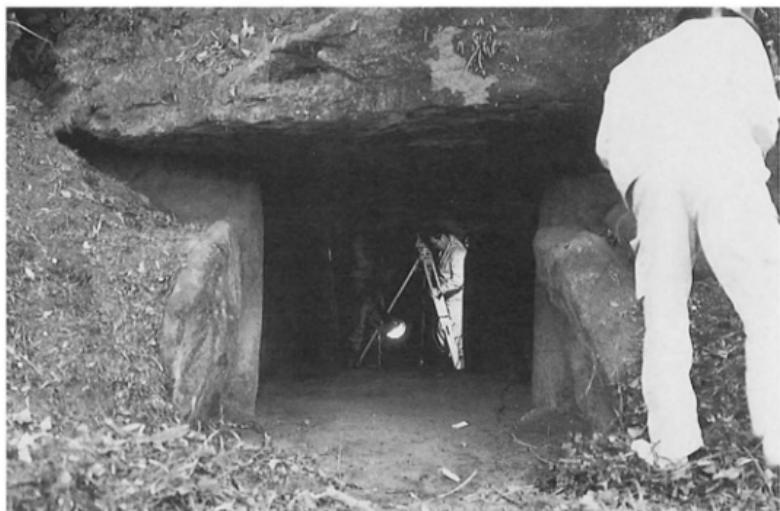


墳丘と石室入口の状況

双六古墳 墳丘



石室入口の状況



石室での調査風景

双六古墳 石室 (1)

図版24



前室から玄室を見る



奥壁の状況

双六古墳 石室 (2)



玄室から入口を見る



玄門と南側壁



玄門と北側壁

双六古墳 石室 (3)

図版26



左側が前方部



調査風景

対馬塚古墳 墳丘 (1)



後円部の状況



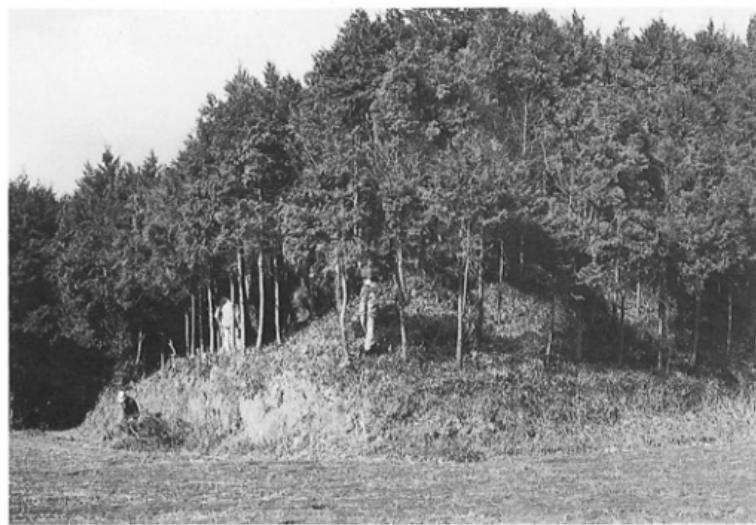
くびれ部での調査風景

対馬塚古墳 墳丘 (2)

図版28



東側から見る



前方部での調査風景

観上山古墳第1号墳 墳丘



石室開口部の状況



石室の状況

観上山古墳第1号墳 石室

図版30



大原天神の森 1号墳(前方部から)



大原天神の森 2号墳(北側から)

大原天神の森 1号墳・2号墳 墓丘



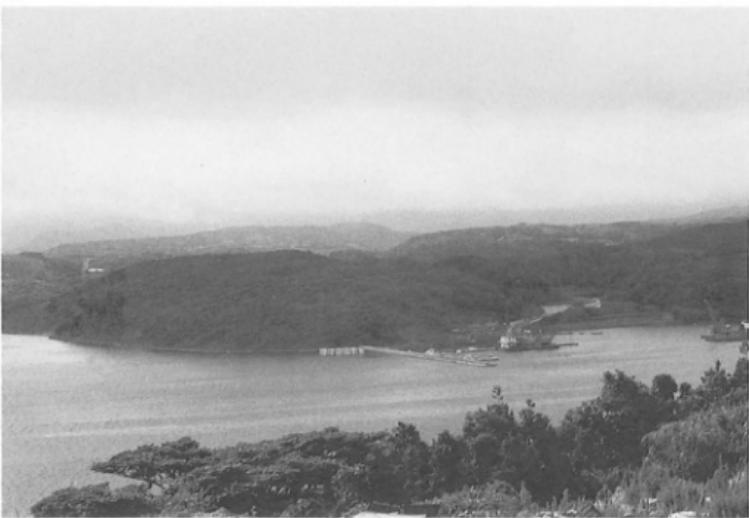
大原天神の森 2号墳後円部(東側から)



大原天神の森 2号墳 墓丘

大原天神の森 2号墳 墓丘

図版32



岳崎古墳遠景(西から望む)



墳丘と調査風景

岳崎古墳 遠景・墳丘



古墳は中央の林の中



調査風景

岳崎古墳 墳丘

図版34



東から見る

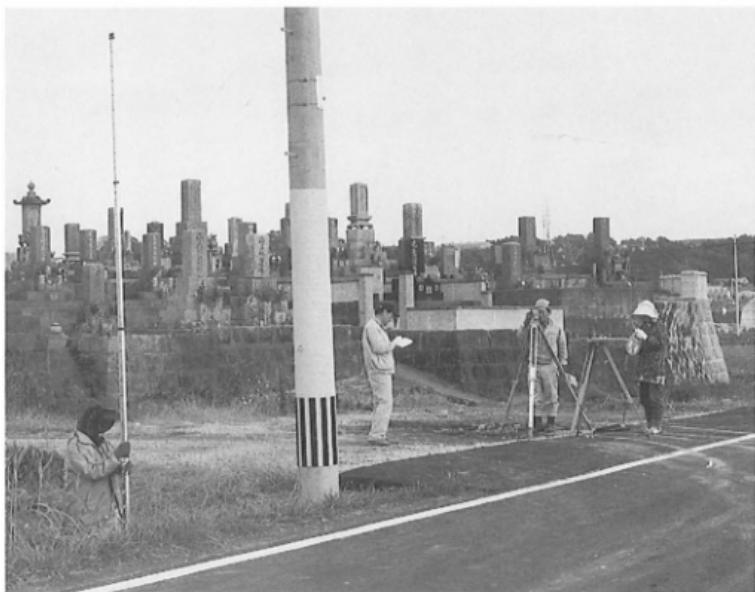


東から見る

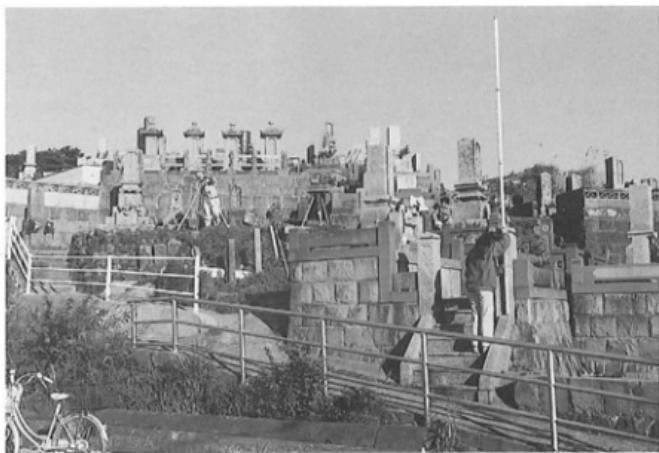


北から見る

守山大塚古墳 墳丘



調査風景(後は九塚古墳)



守山大塚古墳後円部と調査風景
守山大塚古墳 墳丘

長崎県文化財調査報告書 第106集
県内古墳詳細分布調査報告書

平成4年3月31日

発行 長崎県教育委員会
長崎市江戸町2-13

印刷 ニシキ印刷株式会社
長崎市平和町12-10